

菊水町文化財調査報告 第14集

やいごめ はぎわら もでぎ
焼米城跡・萩原城跡・用木城跡

— 菊水町所在の中世城跡 —

1 9 9 9 年

くまもとけんたまなぐんきくすいまち
熊本県玉名郡菊水町教育委員会

やいごめ 焼米城跡・萩原城跡・用木城跡 はぎわら もてぎ

－ 菊水町所在の中世城跡 －



焼米城跡遠景（東側から望む）

1 9 9 9 年

くまもとけんたまなぐんきくすいまち
熊本県玉名郡菊水町教育委員会

序 文

菊水町では、町史編纂事業の一環として、今年度から町内所在の中世城跡調査を実施することになりました。

個々の城跡について、所在地を正しく把握すると共に、遺構が確認された場合は、測量調査によって城跡を確定し、同時に、文献調査や聞き取り調査等を実施することを目的とします。いわば、城跡の戸籍を作成する地道な基礎作業ですが、町史執筆員で、城郭研究家の大田幸博先生を中心とする関係者の御努力や、地元の方々からの御理解と御協力を頂いて、初年度の調査結果がまとまりました。

本報告書に掲載された城跡の中には、萩原城跡のような高山に築かれた大規模山城もあります。この山城は、大変な急斜面をなしていますが、真夏から秋にかけて、その都度、下草を伐採するための機材と、測量機材や木杭を運び上げる非常に困難な作業があつたと聞き及んでいます。考古学の原点を垣間見る思いがしました。

本報告書の発刊によって、郷土に対する理解が益々深まるることを祈念いたします。

平成11年3月31日

菊水町教育長 倉光菊生

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	4
第1節 調査の組織	4
第2節 調査の経緯	4
 第Ⅱ章 遺跡の概要	 4
第1節 菊水町について	4
第2節 菊水町の沿革	6
 第Ⅲ章 調査の成果	 7
焼米城跡	7
萩原城跡	18
用木城跡	26
 第Ⅳ章 まとめ	 35
〔1〕焼米城跡	35
〔2〕萩原城跡	36
〔3〕用木城跡	40
〔4〕文献に見る町内所在の城跡	41
〔5〕菊水町の中世城跡調査	46

挿 図 目 次

第1図 菊水町地形図	5	第17図 大字用木周辺地形図および字図	26
第2図 大字焼米周辺地形図および字図	7	第18図 用木城跡周辺地形図	27
第3図 焼米城跡周辺地形図	8	第19図 用木城跡全体測量図	28
第4図 焼米城跡全体測量図	11	第20図 用木城跡グリッド設定図	31
第5図 焼米城跡グリッド設定図	12	第21図 用木城跡測量図①	32
第6図 焼米城跡測量図①	13	第22図 用木城跡測量図②	33
第7図 焼米城跡測量図②	15	第23図 用木城跡測量図③	34
第8図 焼米城跡測量図③	16	第24図 萩原城の登城道・関連地名	37
第9図 焼米城跡測量図④	17	第25図 亀紐双鳥文鏡	39
第10図 大字萩原周辺地形図および字図	18	第26図 藤原吉政銘入梅花文方形鏡	39
第11図 萩原城跡周辺地形図	19	第27図 亀紐双鶴梅花文鏡	39
第12図 萩原城跡全体測量図	20	第28図 菊水町の中世城跡位置図①	48
第13図 萩原城跡グリッド設定図	22	第29図 菊水町の中世城跡位置図②	49
第14図 萩原城跡測量図①	23	第30図 菊水町の中世城跡位置図③	50
第15図 萩原城跡測量図②	24	第31図 菊水町の中世城跡位置図④	51
第16図 萩原城跡測量図③	25		

写 真 図 版

- 図版1 焼米城跡 I郭（東側から望む）
図版2 焼米城跡 I郭から東方向を望む
図版3 焼米城跡 堀切1（東側から望む）
図版4 焼米城跡 堀切2（東側から望む）
図版5 焼米城跡 III郭
図版6 焼米城跡 III郭（西側崖面）
図版7 萩原城跡 遠景
図版8 萩原城跡 蔓集落の萩原本村
図版9 萩原城跡 II郭-1（I郭から望む）
図版10 萩原城跡 II郭-Aの段差（II郭-2から望む）
図版11 萩原城跡 堀切1（III郭から望む）
図版12 萩原城跡 堀切2とIII郭（IV郭から望む）
図版13 萩原城跡 土塁2
図版14 萩原城跡 堀切3（IV郭から望む）
図版15 萩原城跡 堀切1（II郭-2から望む）
図版16 用木城跡 I郭平場
図版17 用木城跡 I郭平場の南東端を望む
図版18 用木城跡 I郭-1とI郭北側崖面（北西側から望む）
図版19 用木城跡 I郭の南東崖面とI郭-3（I郭-7から望む）
図版20 用木城跡 I郭-10とI郭北西崖面
図版21 用木城跡 I郭北西崖面を望む
図版22 用木城跡 I郭北西崖面に残る積み石
図版23 用木城跡 I郭-4とI郭-7
図版24 用木城跡 I郭北側崖面・I郭-1崖面・I郭-2
図版25 用木城跡 I郭-Aの西側段差面
図版26 用木城跡 堀切1とII郭-1の崖面を望む
図版27 用木城跡 堀切1とII郭-1からI郭側を望む
図版28 萩原本村伝世の和鏡 亀縫双鳥文鏡
藤原吉政銘入梅花文方形鏡
図版29 寺米野伝世の和鏡 亀紐双鶴梅花文鏡

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町教育委員会が、平成11年度に実施した中世城跡の測量調査の報告書である。
2. 測量調査を実施した城跡は、焼米城跡、萩原城跡、用木城跡の3箇所である。
3. 測量調査は、大田幸博氏が行った。
4. 本書の執筆は、大田氏と益永浩仁が行った。
5. 製図は石工みゆき氏と渋口真由美氏が行った。
6. 本書の編集は、大田氏と渋口氏が行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 菊水町教育委員会
調査責任者 倉光菊生（菊水町教育長）
調査員 大田幸博（町史執筆委員） 益永浩仁（菊水町文化財係主査）
調査事務局 水井一誠（菊水町教育課長） 坂口淑子（菊水町文化財係主査）
報告書作成 大田幸博 益永浩仁 石工みゆき 溝口真由美
測量補助 片岡靖臣 永田六三子 青木祐子 永田健二

第2節 調査の経緯

菊水町では、平成10年から町史編纂計画に取り組んでおり、中世城跡調査も、その一環である。町内には、合計16城が確認されているが、ほとんど手つかずの状態で今日に至った。過去の調査事例は、県が昭和50年代初期に実施した悉皆調査と、菊水町の文化財分布図作成時のものである。そこで、今年度から、個々の城跡について測量調査や文献調査を実施し、成果は、その都度、年度毎に、調査報告書を作成することにした。

一連の作業は、町史執筆委員の大田幸博を中心にして、益永と石工みゆきさん・溝口真由美さんが行った。事務局は、大田氏と行動を伴にし、調査区の立ち入りに際しては、地籍図と照合の上、地元と地権者への挨拶を行うなどの補助的な役割も果たした。なお、下草伐採などの環境整備作業については、片岡靖臣氏（菊水町文化財保護員）の多大な協力があった。

今年度は、焼米城跡、萩原城跡、用木城跡の3城跡を調査した。特に萩原城跡は高山に所在する大規模山城で、調査には多くの困難が伴った。

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 菊水町について

- ①明治9年、熊本県下となった際、一部で村の合併が行われた。諸・白石は「瀬川村」。江田・上江田は「角木村」。下津原・西下津原・東下津原・孤田は「下津原村」。久井原・下久井原は「久井原村」となった。
- ②明治22年、市制町村制が施行された。その際、瀬川村・藤田村・前原村・原口村・江田村が合併して「江田村」。日早・靖浦・萩原・用木が合併して「花藪村」。米波尾・蘿原・大屋・久木野・岩尻・高野・志口水・焼米・下津原が合併して「東郷村」。久井原・内田・長小田・江栗・竈門が合併して「川沿村」が成立した。その中で、明治45年まで、江田村と花藪村は、組合村を形成した。
- ③昭和18年の町制施行により、江田村は「江田町」となった。
- ④昭和29年4月1日に、江田町・花藪村・東郷村・川沿村が合併して「菊水町」が成立した。町名は、町内を貫流する菊池川の清流にちなんでいる。
- ⑤面積38.30km²、町の東部境に米野山、南部境に国見山があり、町全体に丘陵地が卓越する。一方で、山鹿市から流入する菊池川が町の北部で大蛇行し、久米野川・江田川・久井原川などを合わせて、南西方向の玉

名市へ流れている。支流一帯には、小規模な沖積平野が広がる。交通面では、町域の南東から北西を、九州縦貫自動車道が走り抜け、菊水インターチェンジが開設されている。町内を、主要地方道（県道）の大牟田・植木線と、玉名・山鹿線が走行する。



第1図 菊水町地形図

第2節 菊水町の沿革

〔古代〕

①江田船山古墳は、5世紀後半から6世紀半頃の前方後円墳で、多彩な副葬品と共に、75文字が銀象嵌された大刀が出土したことでも有名である。かつて、後円部には、家形石棺が露出していたが、平成5年度に「肥後古代の森」として整備された折に、ガラス窓付きの覆屋がかけられ、埋没していた周溝も掘り起された。「治天下猿□□□曲大王世」で始まる銘文の大王は、昭和40年前半まで、「反正天皇説」がほぼ定着し、大刀の製作年代を5世紀前半の末頃としていたが、昭和53年9月に、埼玉県の稻荷山古墳で銘を持つ鉄劍が出土したことで、推論は大きく変化した。鉄劍の「猿加多支曲大王」をワカタケルにあてて、「雄略天皇」と解釈されたからである。猿と猿が酷似していることもあり、最近では、江田船山古墳の大刀銘も、「雄略天皇説」が有力となっている。

②寛政6年(1794)、諸村の墓原で骨壺が掘り出され、中に2枚の銅板が入っていた。火葬墓に伴った銅板墓誌である。1枚に墨書きがあり、発見者から知らせを受けた薬師堂の堂守は、銘文の写しを作成して、元の地に埋め戻す処置を取った。写しは、郡代の手を経て、熊本藩校時習館教授・高木紫浜が解読することになった。ただし、写しが不完全なこともあります、正確な解釈ではなかったが、高木は、「日置郡公墓銅板考」を記し、銘文中の日置氏を堀田人とした。

文政8年(1825)、内田手水憩庄屋が再び銅板を掘り出して、調査を行った。結果として、玉名郡司日置氏の墓誌との推論が出された。最も、墓誌は、明治15年に盗掘されて行方不明となった。出土遺物から、火葬墓の年代は、奈良時代後半と考えられる。

③町域は、玉名郡に属し、「和名抄」に見える江田郷に比定されている。江田は、現在もそうであるように交通の拠点で、古代から肥後国府と大宰府を結ぶ南北の交通路と、玉名地方と山鹿地方を結ぶ東西の交通路が交差していた。江田駅が置かれたのは、このためである。

〔中世〕

文献名	記述内容
島津家文書	*建久8年(1197)6月の薩摩国田帳に、肥後國住人「江田太郎実秀」が名主として登場する。 *同年9月の薩摩国地頭後家人注文に「江田四郎」の名が見える。
蒙古襲来絵詞	*文永の役で、竹崎季長と兜を交換して奮戦した「えたの又太郎ひていゑ」が描かれている。
相良家文書	*文保元年(1317)12月、島津氏に宛給された肥前国福万名地頭職は、元来「江田忍阿」が所持していたものである。 *(推定、南北朝期)、相良定頼井一族等所領注文に、山田左衛門次部分として、江田村田地20町が見え、同地は江田太郎跡であった。

①江田氏は、菊池氏の流れをくみ、肥後國玉名郡江田村を本拠地とし、薩摩や肥前にも、所領する有力な武士団であったとみられる。江田氏は、南北朝時代に南朝方に属したが、その後、目立った活動は知られていない。「肥後國誌」や「古城考」などには、城主としての記載が無く、持ち城も不明である。鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍した中世早期の武将と位置付けられる。

②焼米城跡は、焼米五郎の居城としての言い伝えがある。「蒙古襲来絵詞」に、「やいごめ五郎」の名が見える。同氏の本拠地は、下益城郡松橋(竹崎城跡がある)も考えられるが、江田氏との関係上、焼米にも比定されている。

第三章 調査の成果

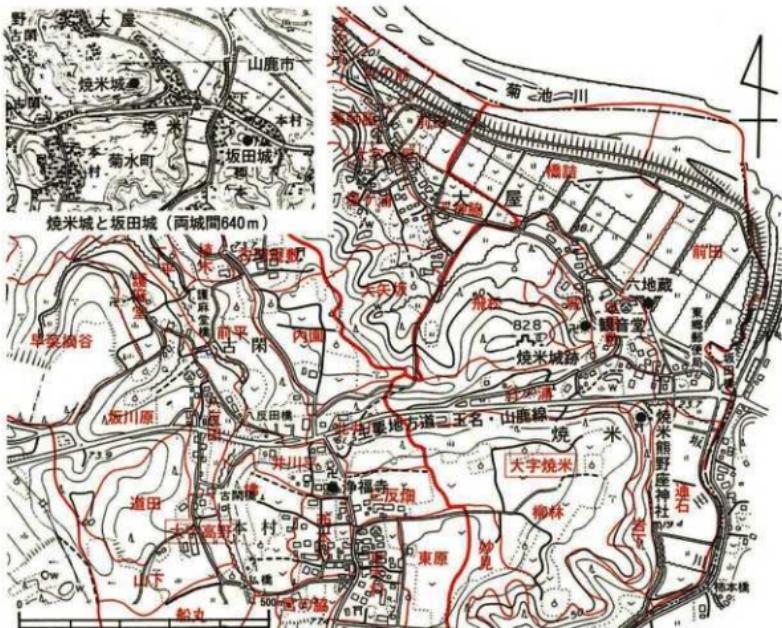
燒米城跡（菊水町大字燒米字城）

山鹿市との行政境近くの菊池川左岸域にあり、同川に注ぐ坂田川の下流左岸に位置する。燒米の麓集落と両河川の間には、肥沃な水田地帯が広がっている。

『肥後国誌』では、「内田手永に属し、高269石余、樋原村104石余は当村に属す」とある。氏神の熊野三社のほか、稲荷宮・妙見宮・曹洞宗西福寺も記されている。字岩下にある焼米熊野座神社は、天安元年(857)に、豈後兵部丞が熊野から勧請したものという。南側裾部を玉名・山鹿線(主要地方道)が走っている。本村地区は、この道路を挟んで南側に展開する。

燒米城跡は、集落の西側にある。東側の山鹿市坂田から眺めた場合、台形をなす小山で、非常に目立つ地形をしている。城跡としてのインパクトは非常に強い。明らかに東向きの城で、残り三方からの眺望は、城としての地形をなさない。特に西側からは全く望めず、近くからでも崖線を見上げるだけの状態となる。

麓集落は、西側を除く三方の裾部で展開する。城跡は、西方向から延びてくる丘陵地の最北端部を利用した小規模な城である。比高差58m程度の小山で、村のセンター的な「縦構えの城」といってよい。城跡の頂上には、城主一族を祀った拝殿と石碑がある。城跡・東側裾部の觀音堂には、数多くの五輪塔が残っている。燒米集落のお年寄りは、城跡に対する愛着が強く、登城坂道と主郭部分は、当番制で清掃作業を行っている。



第2図 大字燒米周辺地形図および字図

第3図 烧米城跡周辺地形図



[概要]

帯状を呈する主郭部分の平場は、2つの堀切(1・2)で、3区画(I～III郭)に区分される。長軸の向きは、東西方向であり、西端で南北両側へ二又に分かれる。そこで、北側の張り出し(II郭-1)は、斜面部が4段に細分され、鞍部にある南側(III郭-2)も、5段の削平地に分かれる。こちら側は、丘陵の本体部分と繋がっているので、最下部には、これを断ち切るための堀切3がある。ここまでが、眞の城域と考えられる(最も、地元では、堀切1から東側のI郭のみを城跡地と見なしている)。

堀切3から先の丘陵背面は、極端に括れて、瘦せ馬の背のようになって、南西方向へ細長く延びていく。焼米城跡の外縁地区にあたるが、平時は、城の間道として、非常時には逃げ道として利用されたのであろう。掲手側の重要な通路である。最終的に、本村地区から延びてくる丘陵の本道と繋がっており、結合地点に、大規模造りの堀切4が刻まれている。外縁地区的南西端にあたり、ここまでが、広い意味での城域である。

[I郭]

隅丸の長方形をなす。長軸28m、短軸は西端で13m、東端で7m。西側寄りで、標高82.6m、城跡の最高所をなす郭である。焼米集落との比高差は58m、拝殿と石碑が建立されている。この郭は、削平地であるが、大方の表土が流失して、岩盤や地山が露出している。地山に柱穴らしき痕跡は、見当らない。

西側を除く三方の直下斜面は、自然地形が卓越する。平場の東端に立てば、菊池川左岸の水田地帯と、山鹿市坂田を抜ける玉名・山鹿線(主要地方道)を一望することが出来る。

[堀切1]

現況は浅い堀切で、上場幅は8.0m、下場幅は1.7～3.0mで、掘り込みの断面形は、皿状を呈する。中央部の深さは、0.55m。南北両端は、堅堀状に掘り窪められている。実測分の長さは25m。南端下には2段の階段状地形が付く。郭を区分する仕切り溝の可能性もある。

[II郭]

隅丸の三角形で、郭の向きは、西側が頂点、東側が底辺にあたる。東西幅17m、南北幅は、東端で17.6m、西端で7.0m。国土地理院の三角点があり、標高82.8m。城跡での最高所である。上面の削平度合いは、さほど高くない。南縁の直下は緩斜面をなし、9.5m下に階段状地形が付くくらいである。上面は西側へ緩やかに下っている。北端は急斜面をなし、3.3m下に、堀切2と繋がる削平地がある。

[堀切2]

ここも現況は、浅い堀切であるが、掘り込みの度合いは、堀切1よりも大きい。II郭側の堀壁は、明らかに削り落されている。上場幅は5.0m、下場幅は1.8～2.6m。中央部の深さは、I郭側から2.0m、II郭側から1.1m。実測分の長さは32m。堀底は、土橋状に掘り残された中央部を拠点として、南北両側へ緩やかに下っている。

[III郭]

長方形をなしているが、北縁は多少の入り込みがあり、亞な箇所もある。長軸55m、短軸は西端で10m、東端で14.6m、最大の括れ箇所で7.0m。西側寄りで、標高81.91m。上面の削平度合いは低く、西側から東側への緩傾斜地となる。ただし、東端は地形に逆らう格好で、若干の微高地となっており、標高81mのコンクが巡る。最高点は標高81.10mで、この部分は、堀切2の排土を使用した積上げ土壘が、崩壊した痕である。南北両斜面と西側斜面は急峻で、中途に階段状地形が付く。

①北下：II郭の北縁から5.36m下った所に2.0m幅の大走り的な削平地がある。多少、II郭側へ凹面状に弯曲しており、全長26m。西端は逆向きとなって、北西側へ大きく跳ねる。この分の長さは8.0m。均一幅で、水平に削平されている。

②南下：2段の階段状地形がある。Ⅱ郭南縁との比高差は、上段で5.34m、下段で10m。削平の度合いは、上段が甘く、下段で顕著。下段は全長49m、幅は西寄りで6.0m、東端で1.6m。

③西下：南下と同様に、2段の階段状地形がある。削平の度合いは、いずれも顕著。Ⅱ郭西端との比高差は、上段で4.8m、下段で7.8m。上段が全長30m、3.0m幅。ただし、北端で曖昧な地形となる。下段は、全長47m、4.0~6.0m幅。

〔Ⅲ郭-1〕

張り出し部分は、4段に分かれる。削平の度合いは、2段目と3段目が顕著で、1段目と4段目は、非常に甘い。Ⅱ郭北西端との比高差は、2段目で5.1m、3段目で8.6m。3段目は全長17.5m、南端幅10.0m。

〔Ⅲ郭-2〕

鞍部に下る斜面部は、5段に分かれる。Ⅲ郭-1と比べた場合、いずれも削平の度合いが大きく、完全な階段状地形である。この内、2段目は、Ⅱ郭の南縁下を走る上段の削平地と繋がっている。4区画に細分される3段目を除いて、いずれも舌状形を呈する。5段目とⅡ郭西端との比高差は14.9m。

〔堀切3〕

ほぼ埋め戻された状態にあるが、東側半分にわずかな旧形が残っている。堀底の東端は、南西側の対岸との比高差は0.3m。

〔堀切4〕

堀切3から細長い丘陵背面(2.0~10m)を、南西方向へ140m程、進んだ位置にある。西側半分に遺構が残り、堀底は堅堀のようになって、斜面部を下っている。東側は、丘陵道が通っているため、はっきりしない。東側対岸は標高71.40m。堀底との比高差は6.36m。西側対岸は標高74.24m。

〔登城道〕

現在、登城口は、玉名・山鹿線の旧道沿いにある。そこからつづら折りに坂道が登り、中途から石段となって、5~6分程度で、城跡のⅠ郭に上がる。かなりの急坂であるうえに、登城口は、麓集落の南端から西側へ大きく迂回する必要がある。登城道としては、不自然な感じがするが、他に集落と直結する登城道らしきものが無いので、認めざるを得ない。これに対し、握手の城戸は、鞍部に築かれた堀切3・4である。



焼米城跡東側据部の観音堂



境内の五輪塔群

* 観音堂の石造物（資料提供：前川清一氏）

六地蔵石幢（竿石のみ）

銘文

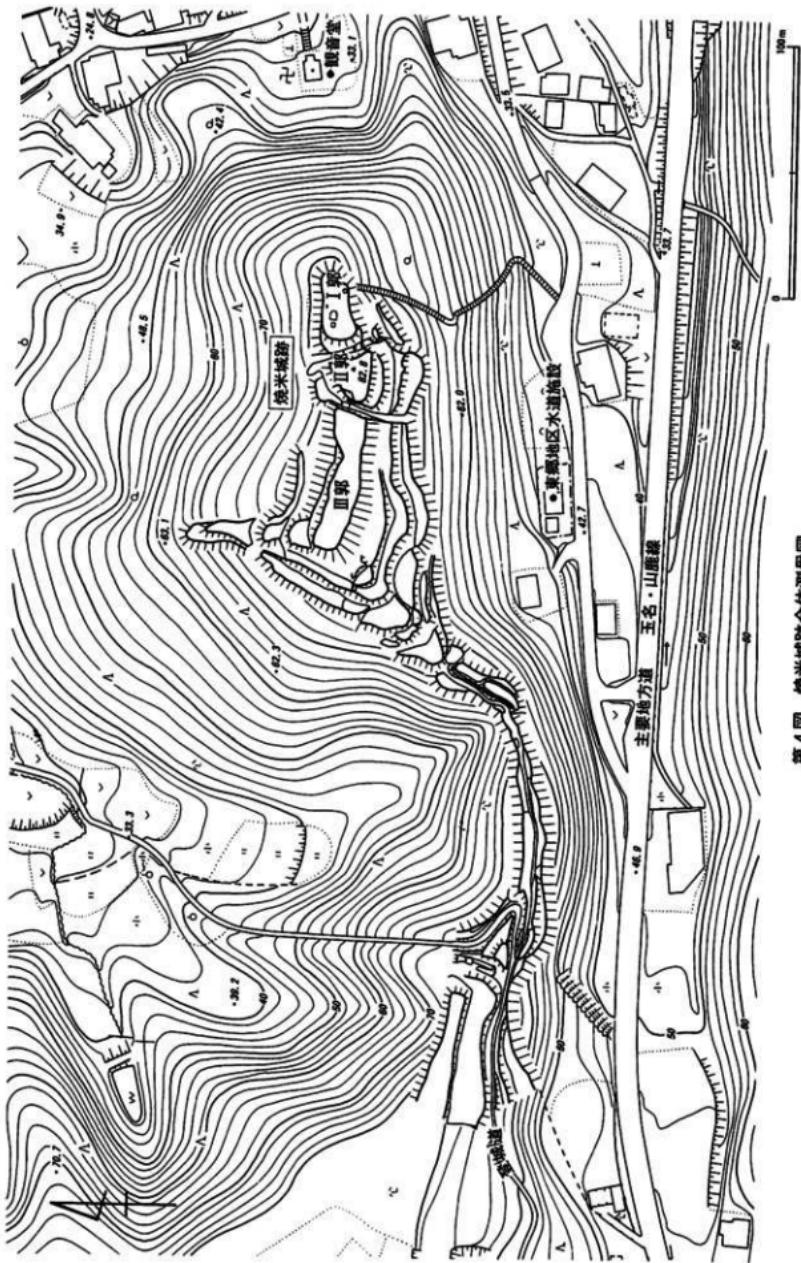
「□□善□□□力 現世安穩 後生善處 烧米秀秋

□□□□□□趣者釋主□□□□宗善男女等結縁一衆（以下土中）

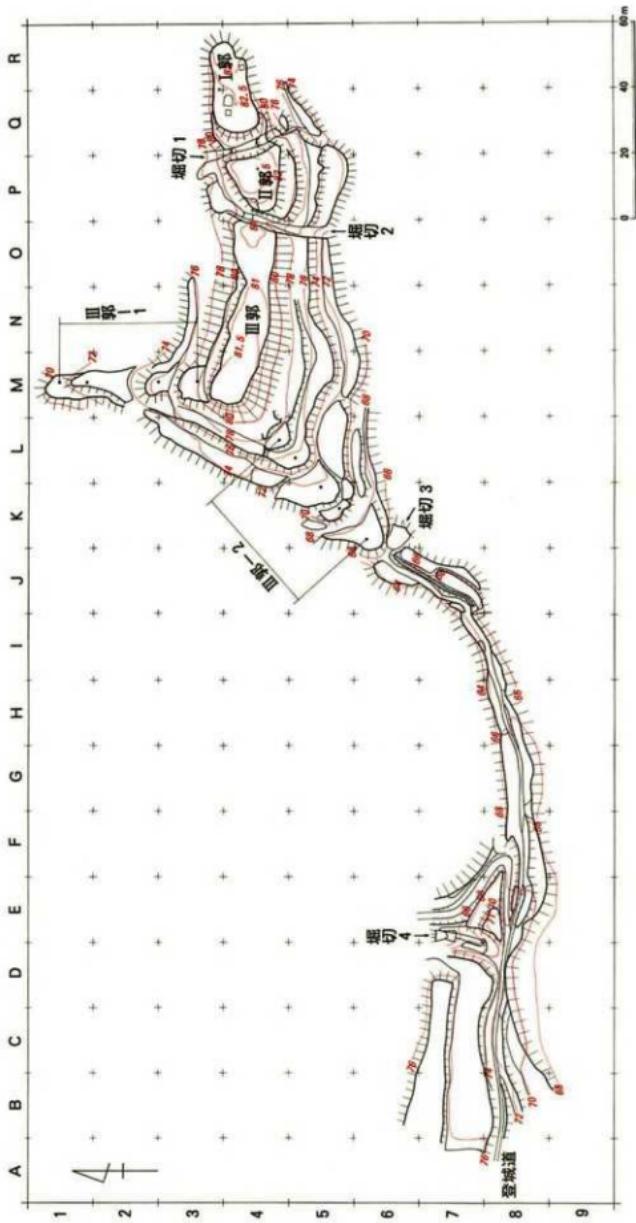
文明十四年⁶二月□七 班□□□（一四八二）」

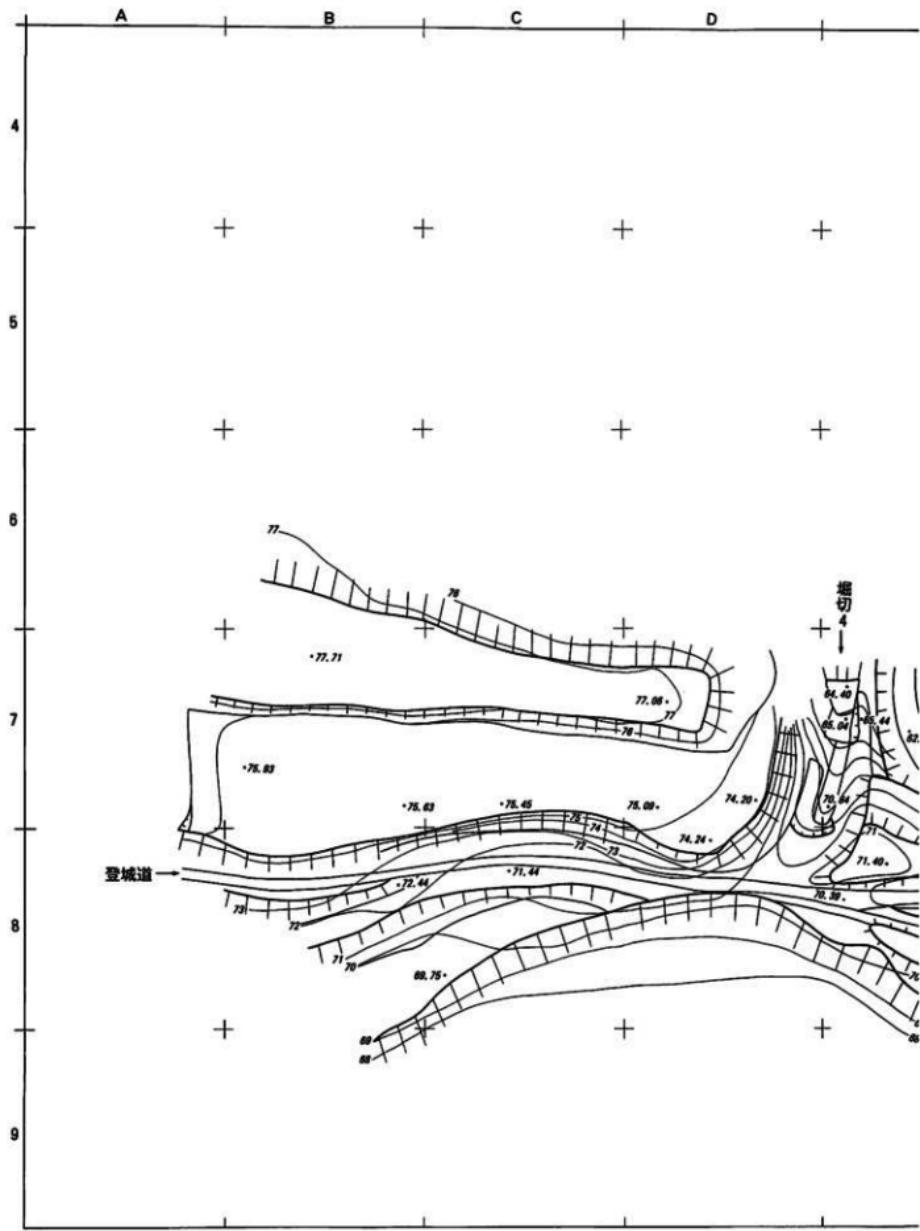
他に74~75名の教名を刻む。

第4圖 烧米城跡全體測量圖

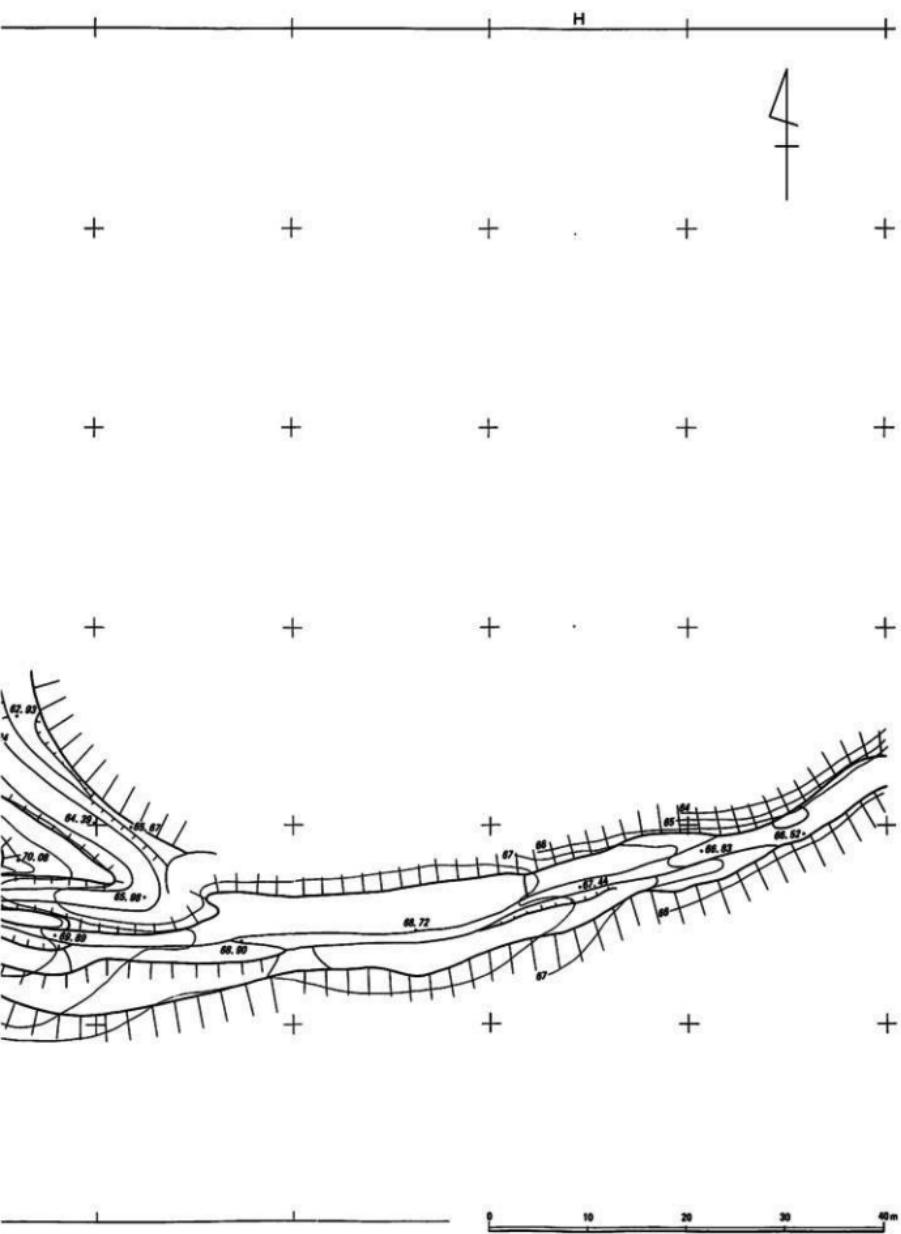


第5図 焼米城跡グリッド設定図

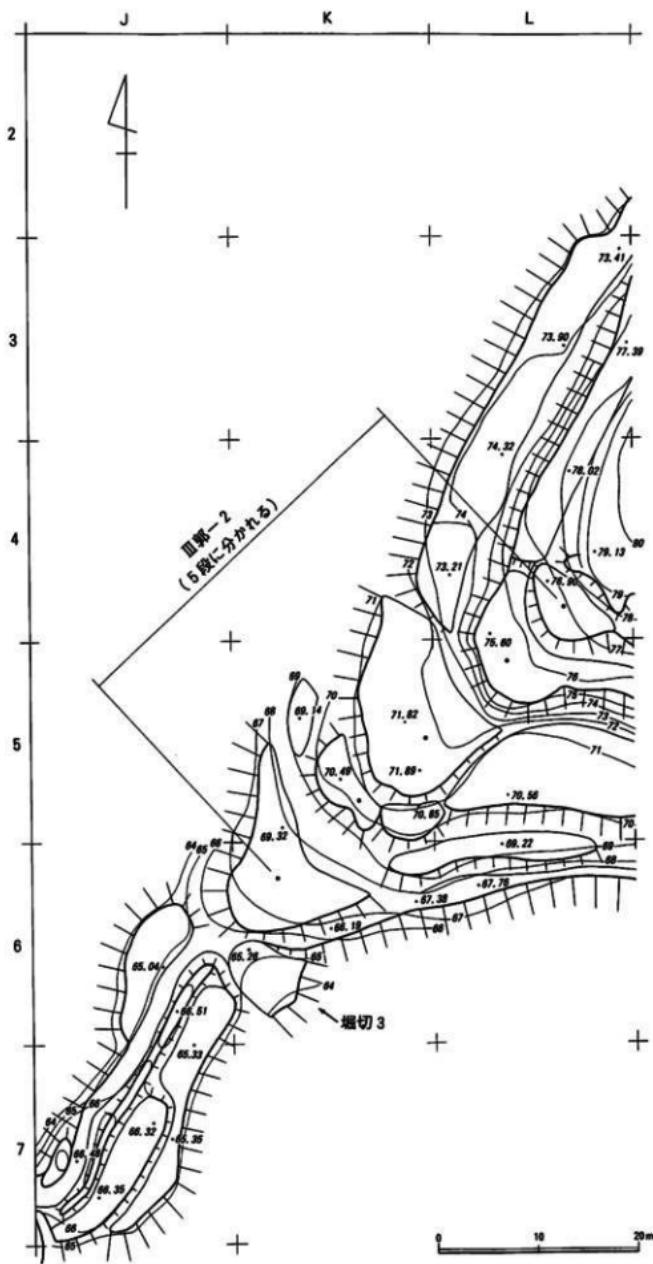




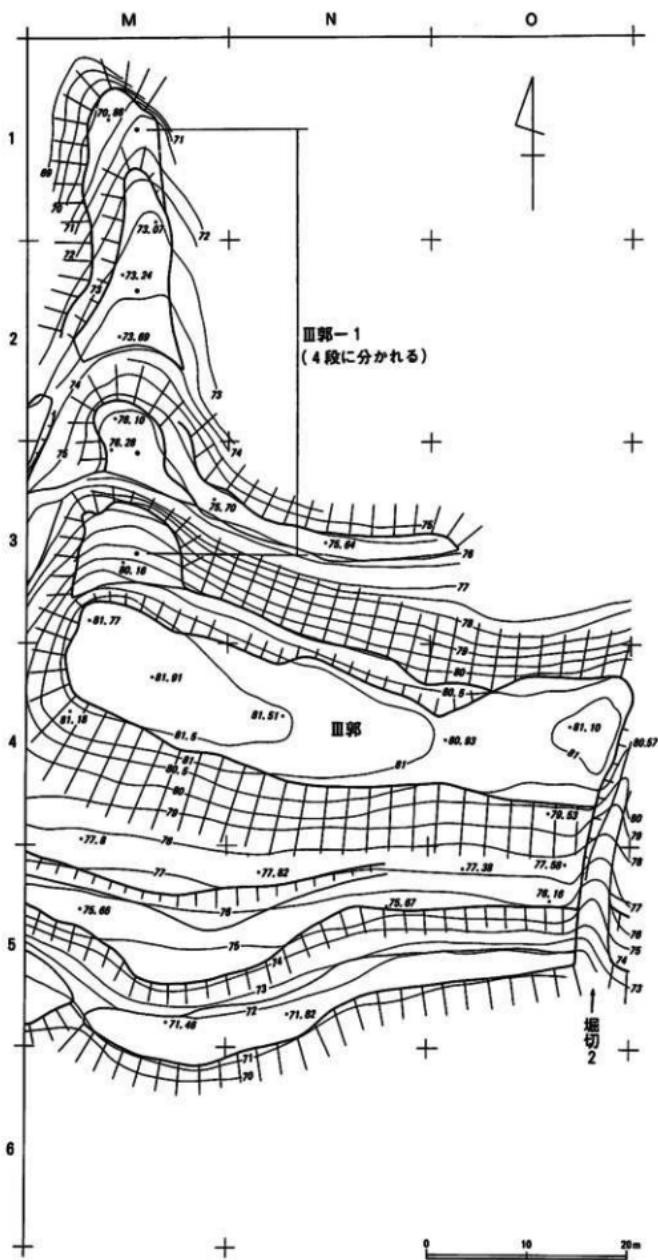
第6図 烧米



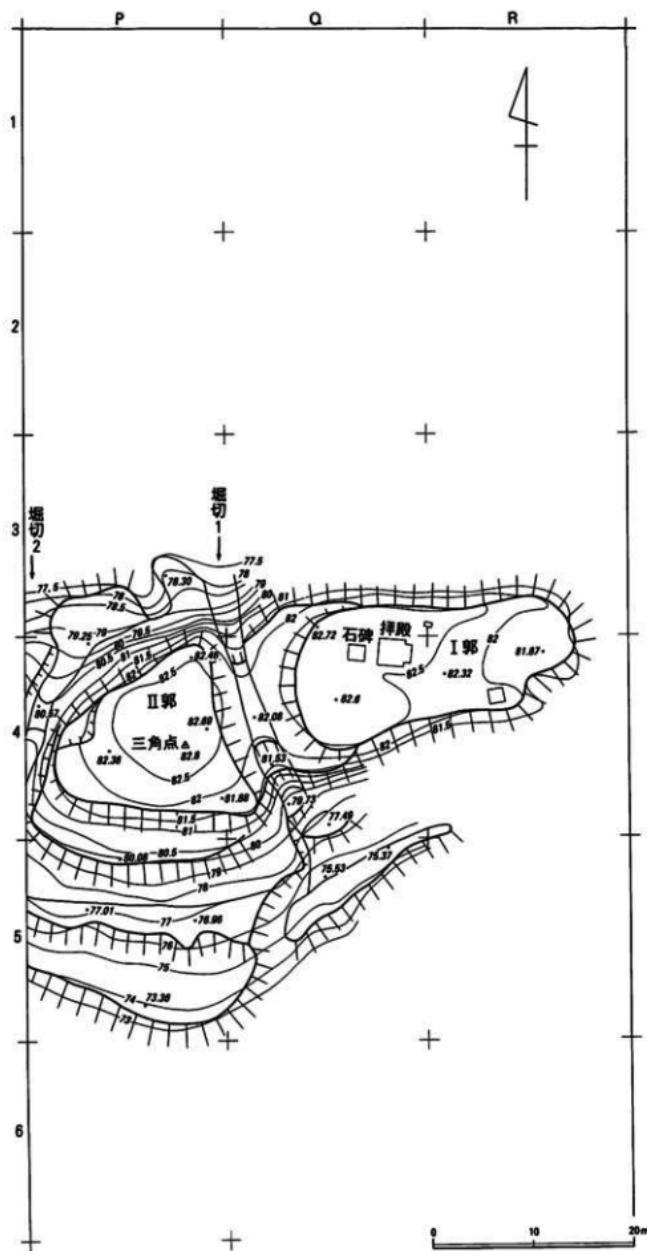
踏跡測量図①



第7図 焼米城跡測量図②



第8図 焼米城跡測量図③



第9図 焼米城跡測量図④

萩原城跡 (菊水町大字萩原字城内)

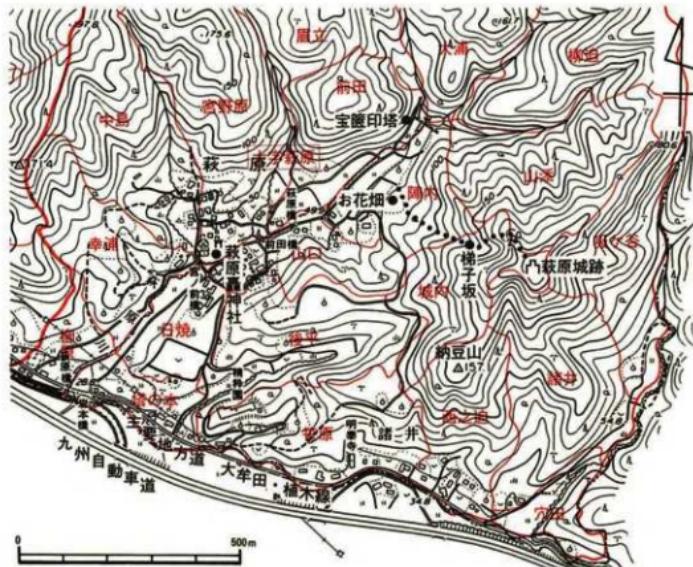
萩原の本村は、南側の大牟田・植木線(主要地方道)から北東側へ400m程、脇道を入り込んだところにある。集落は、南西側を除く三方を、標高200m前後の山と丘陵に囲まれた小盆地で、真東に城山(萩原城跡)、南東側に納豆山が位置する。

萩原城跡は、急峻な山に築かれた本格的な大規模山城である。萩原地区のシンボルで、城名は、老若男女に至るまで浸透している。ただし、登山は容易でなく、戦闘城としての面影が今に残る。集落との位置関係から、西向きの山城である。

近隣の集落に諸井と寺米野がある。諸井は、納豆山の南下にあり、寺米野は、城山の山向こうにあって、鹿本郡鹿央町に属する。いずれも、萩原城跡に間接がある。

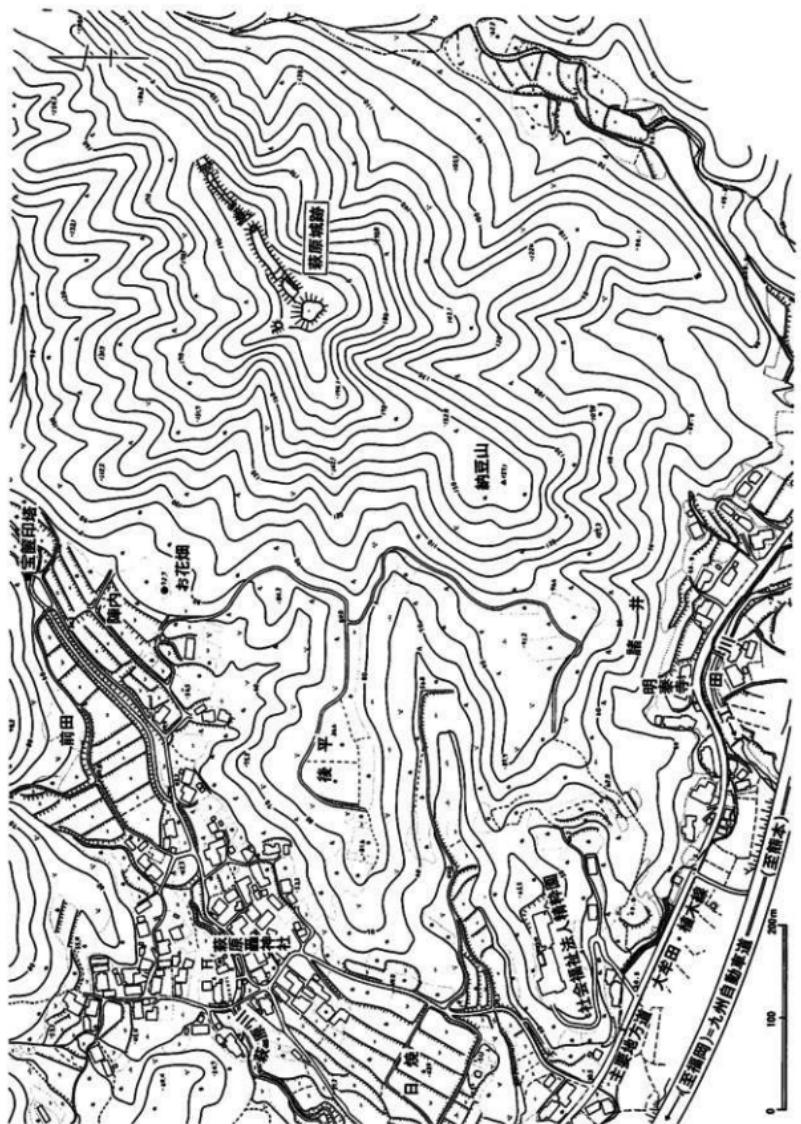
『肥後国誌』によると、初め、内田相良氏が在城したが、天文年間頃に落城した。天正年間には永野氏が居城したが、同7年、隈部氏に攻められて、再び落城した。萩原城の麓集落は、萩原本村である。北東側に谷頭を持つ帯状形の迫地が、萩原川と共に南西側へ下り、本村は、その中央部に展開する。家屋列の最上部には、お花畠と呼ばれる段状地形がある。館跡と伝えられ、東壁の法面下に水汲み場(涌水地)もあったが、平成2年の水害で埋没した。南縁に残る坂道は登城道路で、山腹中の「梯子坂」を経て、I郭の山頂に至る。谷頭付近の北面には、歯の神様として信仰された宝鏡印塔の残欠がある。

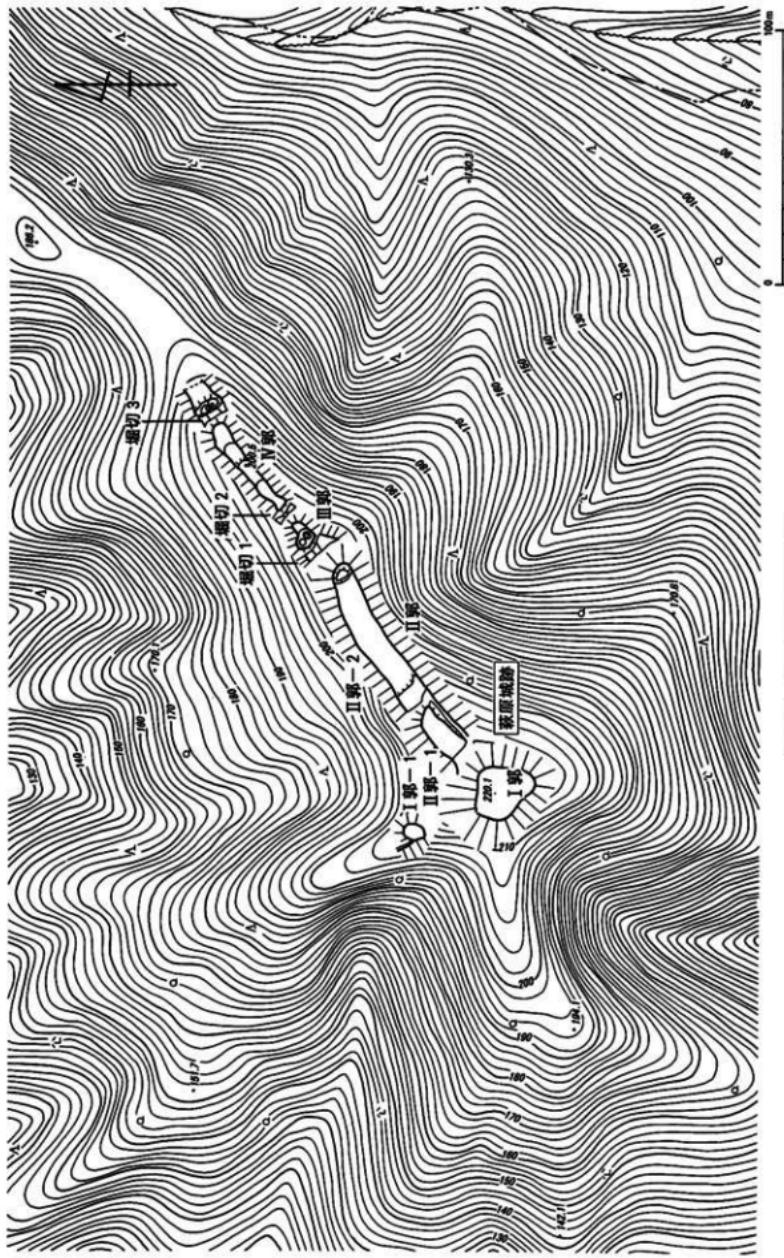
本村の様子について、『肥後国誌』では内田手永に属し、「旧は米野村の内也、米野村は当今中富手永に属する」とあり、高166石余。『国郡一統誌』に村名が載る。『元禄国絵図』にも「米野村の内萩原村」と記している。



第10図 大字萩原周辺地形図および字図

第11図 稲原城跡周辺地形図





第12圖 菊原城跡全体測量図

〔概要〕

谷頭を登り詰めた北面谷部の登城口から、急峻な山腹を噛ぐように登り切り、緩傾斜の北側尾根筋に出ると、程なくして山頂(Ⅰ郭)に上がる。登り始めから、山頂までの所要時間は30分程度である。この尾根筋は、大方が自然地形のままで、僅かに山頂の北側直下で、小削平地(Ⅰ郭-1)を見るに留まる。

山頂は、隅丸台形の削平地(Ⅰ郭)で、西方向下に萩原集落を望む。本体部分の北北東側の尾根筋は、山頂から直線的に漸次、緩やかに下っていく。大小の違いはあるが、尾根筋は3本の堀切(1~3)によって、3区画(Ⅱ~Ⅳ郭)に寸断される。南北両側の山腹斜面は、いずれも切り立った急傾斜地で、要害の地である。したがって、中世城に特有な階段状地形は、全く存在しない。シンプルな縄張りを特徴とする大規模造りの山城である。

〔Ⅰ郭〕軸線は、南北方向から北西側へ大きく振れている。隅丸台形の削平地は、北西側が上辺で、南東側が下辺にある。北西幅10m、南東幅20m、軸線の長さは21m。北西よりの1区画(8.4×6.0m)が一段高く、最高所は標高221.47m。周辺との比高差は1.4m。風避けに積まれた土壘が崩壊したのであろう。山頂直下の四方斜面は、かなりの急勾配で、削り落としの痕跡はない。見張り所を兼ねた中心的な建物が存在した可能性が強い。

〔Ⅰ郭-1〕楕円形状の削平地で、長軸9.0m、短軸6.5m、標高203.93m。山頂北縁との比高差は15.8m。

〔Ⅱ郭〕軸線は、西南側から北東側へ延びており、2区画(Ⅱ郭-1・2)に細分される。

〔Ⅱ郭-1〕山頂からの比高差は、7.2m。半三日月形の削平地で、西南側から北東側への緩傾斜地である。両端では、2.0m近い高低差がある。長軸21.6m、短軸7.0~9.0mで、北東端がすばまる。北東縁の1.0m下に、2.0mの削平通路が走る。

〔Ⅱ郭-2〕本体部分は、完全な平坦地であるが、西南端(Ⅱ郭-A)は一段高い。北東端には土壘が積まれている。

〔Ⅱ郭-A〕山頂直下の斜面とⅡ郭-2との間にある。土壘や土塙の類ではないが、端部が一段、高くなっている。Ⅱ郭-2との比高差は、0.7m。尾根筋の掘り残しのように見えるが、削平地であることに間違いない。標高207.26m。尾根筋方向の長さ8.0m、幅12.0m。

〔本体〕長軸49.5m、幅9.0~12.0m。地元では、「馬の調教場」とも伝えている。細長い帯状の平地から生じた凸起である。同様な城跡の地形を「馬喰め場」と呼ぶ地域もある。元から本体部分の尾根筋は、瘦せ馬の背のような地形をして、上面は、かなり平らだったことがわかる。そうでなければ、造成工事によって、これ程までの平坦地は出来ないだろう。標高は西南側で206.55m、中央部で206.42m、北東側の土壘近くで206.40m。この区域には、兵舎や倉庫が建ち並んでいた可能性がある。

〔土壘1〕最高所は、標高207.34m。堀切との比高差は0.4m。土壘は長さ6.5m、幅9.5mの範囲に納まる。Ⅱ郭-2の造成工事で生じた堆土を積み上げているが、かなり崩壊している。

〔堀切1〕大工事が行われている。元来、大きく段落ちする尾根筋の斜面部を、急峻に削り落した上で、基底部分を鋭く断ち切った堀切である。Ⅱ郭-2側の堀壁には、整形された岩肌が露出している。堀底は、土橋状に掘り残された中央部を拠点として、南北両側へ緩やかに下っている。堀底の中央部は、幅・長さ共に3.0m、標高197.75m。Ⅱ郭-2と土壘上面の比高差は9.6m、北東側のⅢ郭とは、1.4mの高低差がある。全体としての堀底は、幅が北西端で3.5m、南東端で6.0m、長さ14.5m、南東端で、やや末広がりとなる。

〔Ⅲ郭〕堀切1と堀切2で仕切られた区域で、上面域は、隅丸方形の狭い平地を軸としてL字形をなす。最高所は、標高199.16mで、長軸6.0m、短軸5.0m。中心部に2.5×3.0m、深さ0.4mの大穴がある。大木の樹根を抜き取った痕であろうか。この区画から西側へ長さ9.0m、北東側へは、長さ10.5m、幅4.0mの緩傾

斜地となる。西側部分にも、同一規模の大穴が見られる。

〔堀切2〕尾根筋を均一幅で直角に断ち切っている。

堀底の造りは、堀切1と同じ。中央部は、幅1.4m、長さ2.4m、標高194.46m。Ⅲ郭との比高差は3.8m。

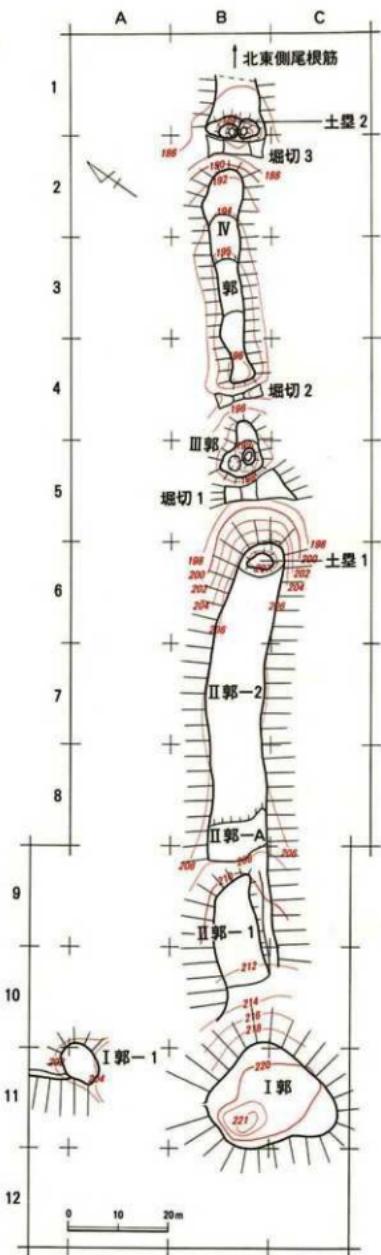
Ⅳ郭とは、1.7mの高低差がある。全体規模の堀底は、両端とも3.0m、長さ9.0m。堀切の上場幅にあたるⅢ郭～Ⅳ郭間は、7.5m。広い意味では、堀切1～Ⅲ郭～堀切2で、二重堀を形成している。Ⅲ郭は、堀切に抉まれた土壘(尾根の削り残し)のようなものである。単独で、郭を形成するような状況はない。外観的にも、土壘状の小山をなす。

〔Ⅳ郭〕尾根筋は、瘦せ馬の背のようである。萩原城跡は、元来、この地形に沿った縄張りとなっているが、Ⅳ郭は、その中でも、極端な地形である。上面の削平は完全ではなく、丸みを帯びた自然地形が残っている。その意味で、積極的に利用された郭ではなかろう。長軸42m、短軸3.0～7.5m、最高所は土壘の上面で、標高191.16m。西南側から北東側への緩傾斜地で、両端の比高差は4.2m。四区画に細分される。西南端に土壘の痕跡がある。

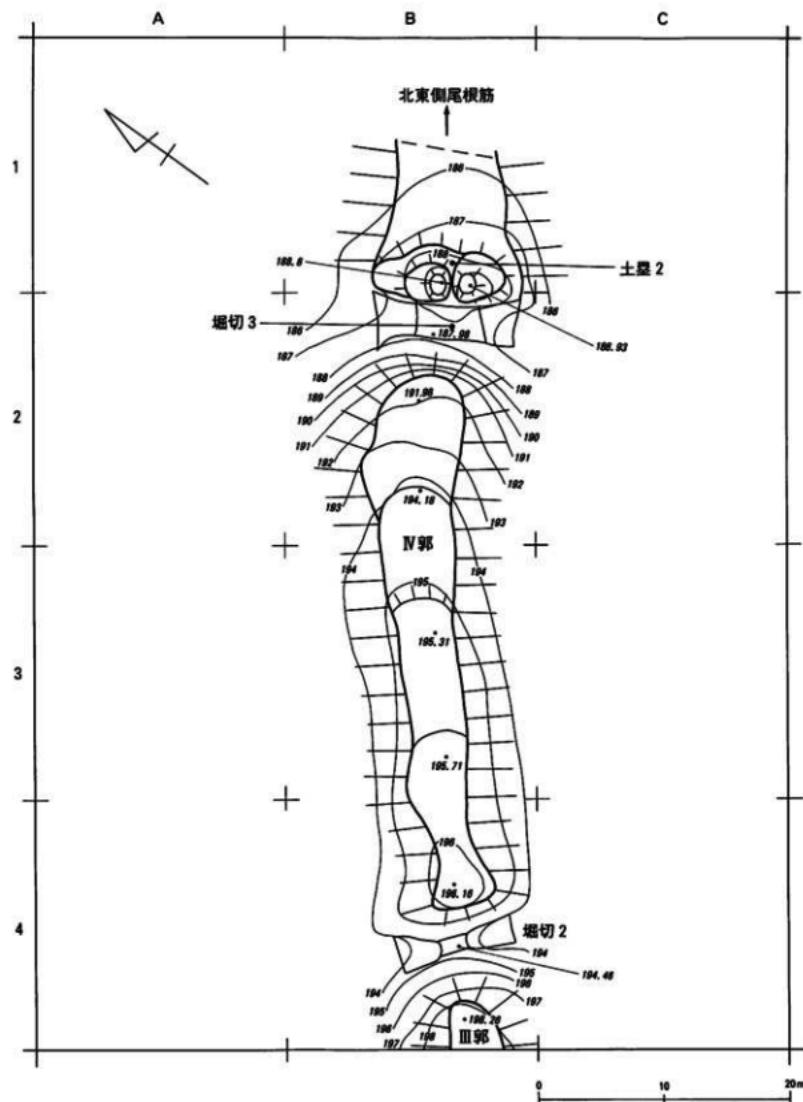
〔堀切3〕尾根筋を、堀切2と同様に、均一幅で直角に断ち切っている。堀底の造りは堀切1・2と同じ。中央部は幅2.6m、長さ5.2m、標高187.98m。Ⅳ郭との比高差は4.0m。対岸となる北東側尾根筋とは、0.8mの高低差がある。全体としての堀底は、両端とも4.0m、長さ11m。

〔北東側尾根筋〕堀切3で断ち切られた、城外の尾根筋である。西端に土壘が築かれているほか、この尾筋は、まったくの自然地形で、北東側へ漸次、下っていく。

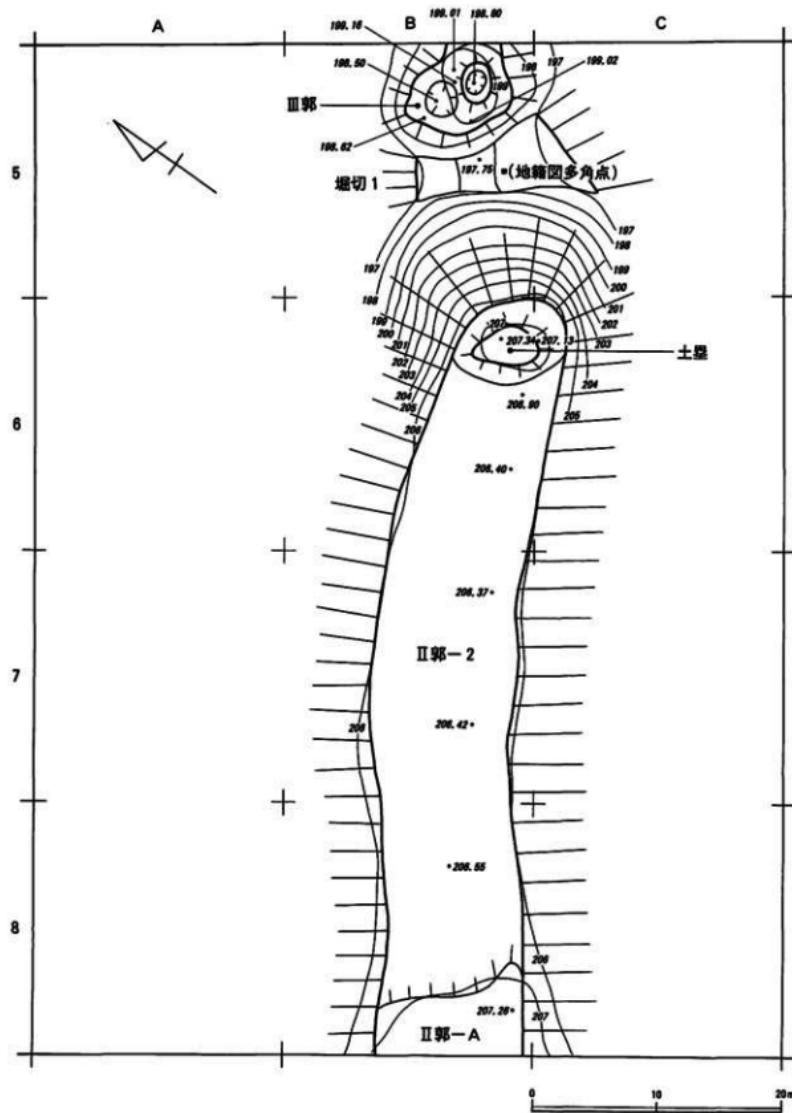
〔土壘2〕最高所は、標高188.93m。据部との比高差は1.9m。土壘は長さ10.5m、幅5.0mの範囲に納まるが、後世に造られた尾根筋づたいの山道より、二分されている。堀切3の堆土を積み上げたものである。



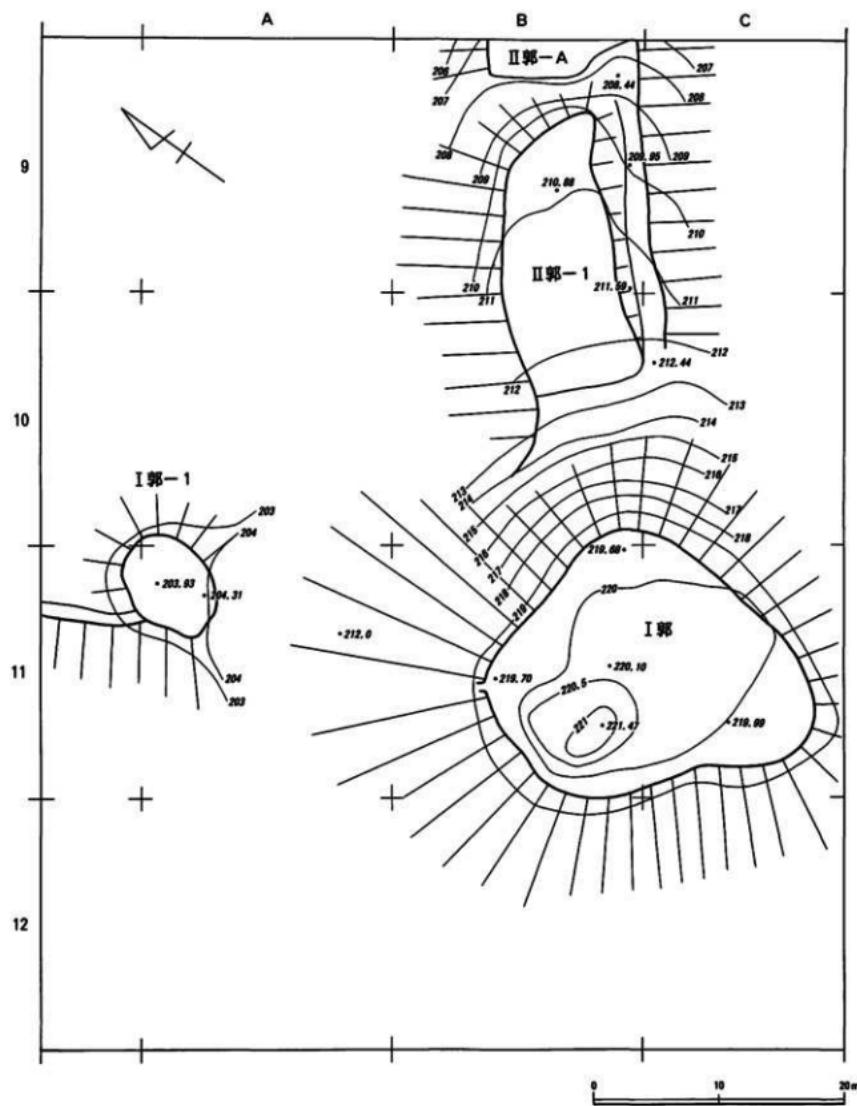
第13図 萩原城跡グリッド設定



第14図 萩原城跡測量図①



第15図 萩原城跡測量図②



第16図 萩原城跡測量図③

もてぎ 用木城跡 (菊水町大字用木字上河原毛)

用木集落は、大牟田・植木線(主要地方道)沿いに展開し、南縁を江田川が西流する。城跡は、用木集落から、北側へ緩やかな丘陵道を100m程、登り詰めた所にある。集落からは、まったく目立たない城で、城跡としてのインパクトは弱い。距離を置いて、南側の九州縦貫自動車道付近から眺めれば、城跡の存在がわかる程度に過ぎない。南向きの城で、地図上での直線距離にして2.1km先に、日平城跡の山容を遠望することが出来る。不思議なことに、集落で、用木城跡の存在を知る人は少ない。

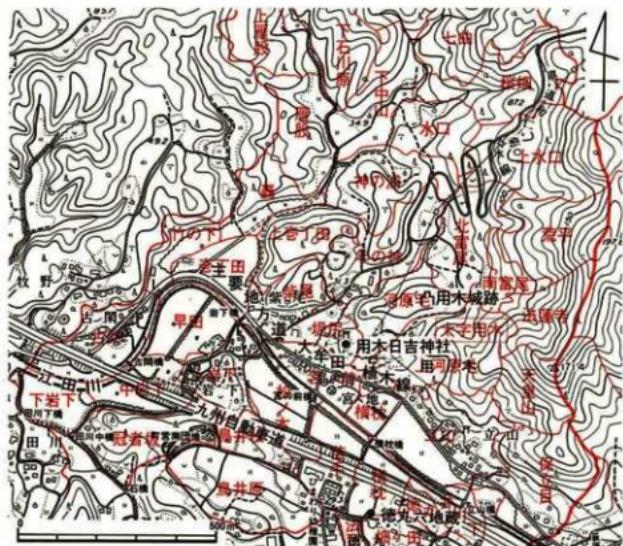
「肥後國誌」によると、用木村と見え、内田手永に属する。「岩下と云小村あり」とある。高290石余。氏神の山王二十一社、阿蘇六之宮、森社、天神社、宝蓮寺跡の小堂を記している。法蓮寺は、觀音平(後、上用木村に属する)から、川向こうの徳丸に移され、宝蓮寺となって廃寺となった。宝曆13年(1763)の下ヶ名寄帳は、用木村から上用木村が分かれている。明治9年に、両村は合併し用木村となる。

野添の溜池を用水とし、堤尻に、旧村社用木日吉神社がある。神社は城跡の南西側に位置し、丘陵ラインの最下部にある。段々畠との境には、掘切らしき窪地が残る。徳丸の六地蔵の竿石に、文明14年(1482)3月16日建立との銘文がある。

大牟田・植木線脇の登城口から、山付きの緩やかな丘陵の坂道を登ると、5~6分で、丘陵地の最高所(Ⅰ郭)に達する。しかし、そこに至るまでには、一帯に役々畠が広がり、城域の把握が非常に困難である。従って、確実に繩張りであるもの〔1〕と、参考地〔2〕に二分した上で、個々の地形〔3〕の説明を行なう。



徳丸の六地蔵



第17図 大字用木周辺地形図および字図

1. 構造

I郭(最高所)の上面は、削平地で、四方の斜面が顕著に削り落されている。ここを軸として、周辺部には、城跡としての雰囲気が感じられる。

①北側斜面：上下二段の階段状地形(I郭-1・2)があり、上段は、北西側において、丘陵の張り出し部(II郭)を切り離している(堀切1)。I郭の斜面は、削り落としの痕跡が顕著である。

②南側斜面：4段の階段状地形(I郭-3～6)がある。いずれも大走りのような細長い削平地を特徴とする。最上段の東端は、東側斜面の階段状地形に繋がる。三段目は3区画に細分される。

③東側斜面：3段の階段状地形(I郭-7～9)がある。尾根筋を直方向に削り下げたものである。

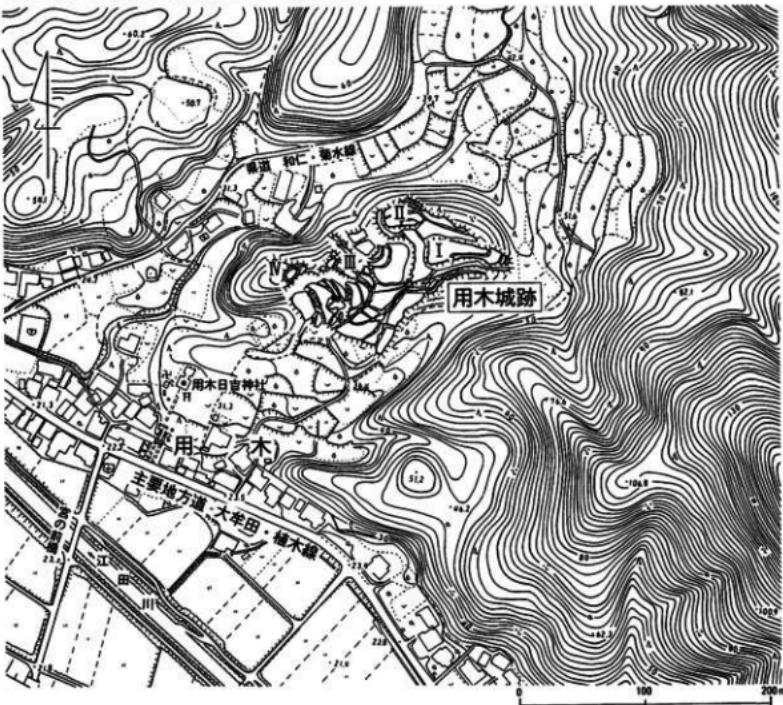
④西側斜面：階段状地形(I郭-10)がある。I郭側の斜面は、削り落としの痕跡が顕著で、一部に凝灰岩の切石が貼り付いている。積み石の残欠であろうか。

II郭は、I郭から切り離されたもので、上面の状態から、捨て曲輪のように見える。それでも、北東側斜面に2段(II郭-1・2)、西側斜面に1段(II郭-3)の階段状地形がある。

III郭は、丘陵の派生部分にある。平場の中央部に、高圧線の鉄塔が建つ。I郭とIII郭との間は、痩せ馬の背のように、上面城が狭くなっている。ただし、堀切はない。北東側斜面に3段(III郭-1・2)、西側斜面に1段(III郭-4)の階段状地形がある。

IV郭は、III郭から西側へ、やや下った所にある。丘陵・派生部分の末端部で、小山のようになっている。

III郭と繋がる鞍部は、極端に括れている(堀切2)。



第18図 用木城跡周辺地形図

第19図 用木城跡全体測量図



2. 参考地

丘陵の主軸は、Ⅰ郭の南西隅で一旦、括れた後、大きく広がりながら、集落側へ緩やかに下っている。中途から、全面、階段状の畑地となる。段差面に削り落としが感じられる範囲を図化した。

Ⅱ郭とⅢ郭に挟まれた西側谷部に、5段の階段状地形がある。最上段は大きな削平地で、Ⅰ郭-10との段差面に顕著な削り落としが見られる。

派生尾根の下部から、Ⅲ郭とⅣ郭の南側谷部にかけて、7段の階段状地形がある。下部の2段は、大きな削平地である。各段差面は、削り落とされている。

3. 個々の地形について

〔Ⅰ郭〕

非常に整形された地形で、隅丸・鋭角三角形の削平地である。南縁のみが、やや内側に抉れた格好になっている。東西に長軸の向きがあり、東側が先端部で、西側が底辺部にあたる。長軸48m、西側幅19m、東側幅4.0m。中央部は、標高60.35m。平地であるが、東寄りの長さ20mの範囲は、若干の微高地をなし、標高60.5mのコンクが巡る。最高所は、東端部分にあり、標高60.60m。

〔Ⅰ郭-1〕

Ⅰ郭に直結するナイフ形の削平地である。形状的には、東側で半月状にすばまり、西側で、そのまま堀切1の堀底に繋がる。平地で長軸36m、幅3.5~6.5m。中央部は、標高57.39m。Ⅰ郭北縁とは、2.9mの比高差がある。Ⅰ郭崖面の削り落としは、非常に際立っている。

〔堀切1〕

農耕の際に、地脚らしが行われたようである。現況の堀底は、Ⅰ郭-1の上面と同じレベルにあり、区別がつかない。堀底幅は、西端10m、東北側斜端18m。長さは、北西端11m、南端19.5m。標高57.27mで、Ⅰ郭の北西縁とは2.9m、Ⅱ郭とは1.7mの比高差がある。堀壁の状態は、Ⅱ郭側の削り落としが、甘い感じがする。上場幅にあたるⅠ郭とⅡ郭間は、南西端で17m。

〔Ⅰ郭-2〕

帯状の削平地である。北縁の凸凹は、土砂崩れのためであろう。東西両端は、極端にすばまっている。平地で、長軸41m、最大幅6.0m。中央部は、標高55.43mで、Ⅰ郭-1とは2.0mの比高差がある。これより下部は、急傾斜になって北側へ下る。

〔Ⅰ郭-3〕

細長い削平地で、犬走りに近い形状をしている。東端でⅠ郭-7に繋がり、長軸26m、幅はほぼ均一で2.0m、西端のみが3.5mに膨らむ。Ⅰ郭の南縁に食い込むような格好をしている。西端は、標高53.69m、Ⅰ郭との比高差は0.7m、平地である。Ⅰ郭の緩斜面を削平したものであろう。

〔Ⅰ郭-4〕

細長い削平地で、犬走りそのものである。平地でⅠ郭とⅠ郭-3に併走するが、地形の制約を受けて、両端で、南東側と北西側へ折れ曲がる。直線部分で長軸36.5m、短軸4.0m。南東側で長軸24m、短軸2.4~4.0m。北西側で12.5m、この箇所では、端が極端にすばまっている。中央部で、標高55.29m、Ⅰ郭-3とは、4.4mの比高差がある。

〔Ⅰ郭-5〕

基本的には、犬走りであるが、一様な平地でなく、3区画に細分される。東側から西側への段落ち地形(A・B・C)となっている。

①Ⅰ郭-5A：長軸16m、幅1.5~3.0m。標高53.37m。Ⅰ郭-4との比高差は1.6m。

② I 郭-5B：長軸10.5m、幅2.0~3.0m。標高52.10m、I 郭-5Aとの比高差は1.3m。

③ I 郭-5C：長軸17m、幅2.5m。西端で極端にすばまる。標高51.54m、I 郭-5Bとの比高差は0.6m。

[I 郭-6]

帯状の削平地で、大走りそのものである。長軸50m、幅1.2~2.5m、標高51.09m。この段までの崖面には、削り落としの痕跡がある。これより下部は、畠地状の削平地を挟んで、南側谷部となる。

[I 郭-7]

隅丸・方形の削平地である。平地で、長軸12.5m、幅9.0m、標高58.8m。I 郭との比高差は、2.3m。形状的にまとまりを持った地形である。

[I 郭-8]

梢円形を長軸ラインで半裁した小規模な削平地である。I 郭-7の緩斜面を割り下げたもので、長軸8.5m、幅4.0m、標高57.81m。I 郭-7との比高差は0.5m。

[I 郭-9]

I 郭-8と、形状も性格も同じ。長軸8.0m、幅2.0m、標高56.26m、I 郭-8との比高差は1.6m。これより下部に、削平地は無く、斜面部が東側谷部に下る。

[I 郭-10]

I 郭に直結する逆「く」の字型の大きな削平地である。直線部分(A)は、南端でやや緩斜面となる。北側では、北西側へ折れ曲がり(B)、南側は東側へ張り出している(C)。

(A)：長さ30m、幅7.0m、標高56.57m。I 郭西端との比高差は3.3m。登城道から、丘陵を登り切った

所に現われる地形で、非常にインパクトの強い地形である。中央部と南端との比高差は0.8m。

(B)：長さ13m、幅9.0m、標高56.31m。堀切1・西端との比高差は0.5m。

(C)：張り出し部分の長さは9.0m。東端部は三角形となる。東下のI 郭-4との比高差は1.0m。

[II 郭]

長軸は東西方向にある。上面域は一様に平坦地ではなく、3区画(A・B・C)に細分される。削平の度合いが低い小区画で、II郭と大きく異なる。

① II郭-A：II郭の最高所である。長方形状の小削平地で、東端は、舌状形を呈する。長軸13m、幅4.0~5.0m。標高59.01m、I郭の最高所とは、5.0mの比高差がある。東側から西側への緩傾斜地で、高低差は0.2m。

② II郭-B：長円形の削平地で、南側の中央部寄りにII郭-Aを乗せる格好となる。長軸31m、幅は、西側で9.5m、中央部で4.0m、東側で8.0m。標高58.32m、II郭-Aとの比高差は0.8m。段差面の整形度合いは、甘い。

③ II郭-C：三日月形の削平地で、長軸25.5m、最大幅は、西側寄りで5.7m。標高57.01mで、II郭-Bとの比高差は、1.2m。段差面の整形は無いに等しく、緩斜面となっている。

[II 郭-1]

小規模な細長い大走り状の削平地である。標高55.47m、東端で、I郭-2と繋がるもの、高さ0.3mの段落ちとなっている。長軸18m、最大幅は、中央部で、2.0m。II郭-Cとの比高差は1.5m。段差面には、削り落としの痕跡がある。

[II 郭-2]

II郭-1と、形状も性格も同じ。ただし、西側寄りで極端にすばまる。標高53.88m、長軸15.4m、幅は中央部と東側が2.0~2.4m、東側で1.0m。

[II 郭-3] II郭の西下を包み込むような弧状の削平地である。標高55.19m、II郭の西端とは、2.9mの比

高差がある。崖面には、顕著な削り落としの痕跡がある。南北両端の直線距離は、25.5m。幅は、北側で3.6m、中央部で2.8m、南側で4.8m幅に膨らむが、端では大きく括れて消滅する。非常に目立つ削平地で、これより下部は急斜面となって谷部に至る。

〔Ⅲ郭〕

長方形状の削平地で、北西端は舌状形を呈する。南東側下に、極端に括れた鞍部がある。長軸28m、幅は、先端部よりで10m、南東側は5.0mで、端部はすばまる。中央部に、高圧線の鉄塔が立つ。標高54.32m、Ⅰ郭とは、6.3mの比高差がある。両脇の斜面部に、削り落としの痕跡はない。

〔Ⅲ郭-1〕 Ⅲ郭直下にある舌状形の小削平地。標高52.41mで、Ⅲ郭の先端部との比高差は0.9m。長軸4.0m、基底部の幅は、5.5m。

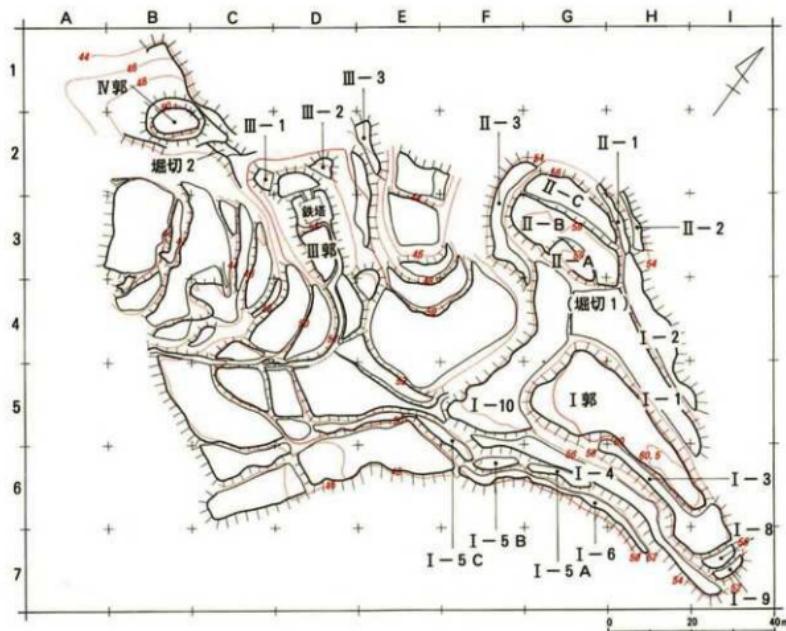
〔Ⅲ郭-2〕 帯状形の削平地で、両端部はすばまる。長軸23.5m、幅は中央部で3.5m。標高49.98mで、Ⅲ郭との比高差は4.34m。

〔Ⅲ郭-3〕 Ⅲ郭-2と同じ。南東側は丸みを帯びてすばまる。長軸13.5m、幅は、北西端で3.5m、中央部で2.0m。標高47.99mで、Ⅲ郭-2との比高差は1.99m。

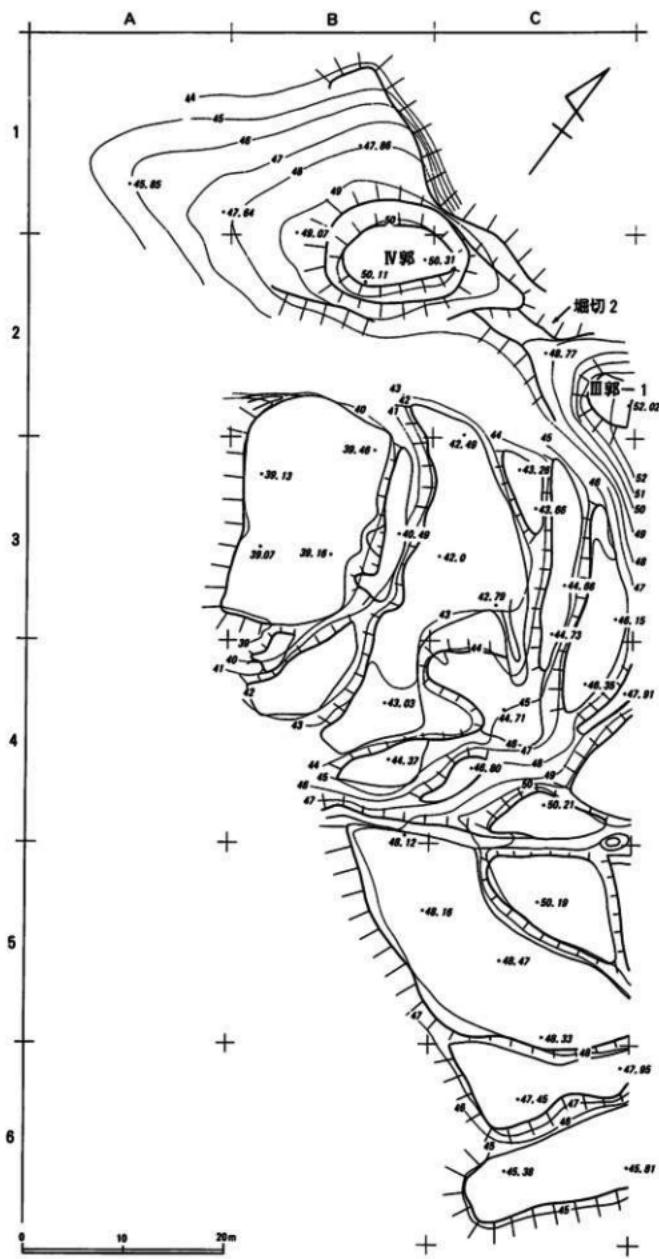
〔Ⅲ郭-4〕 Ⅲ郭-1と対をなす小削平地。形状も同じ。標高52.02m。長軸4.5m、基底部の幅は4.0m。

〔堀切2〕 挖削された状態にないが、地形的には堀切そのもので、堀底に該当する部分の幅は2.0m。

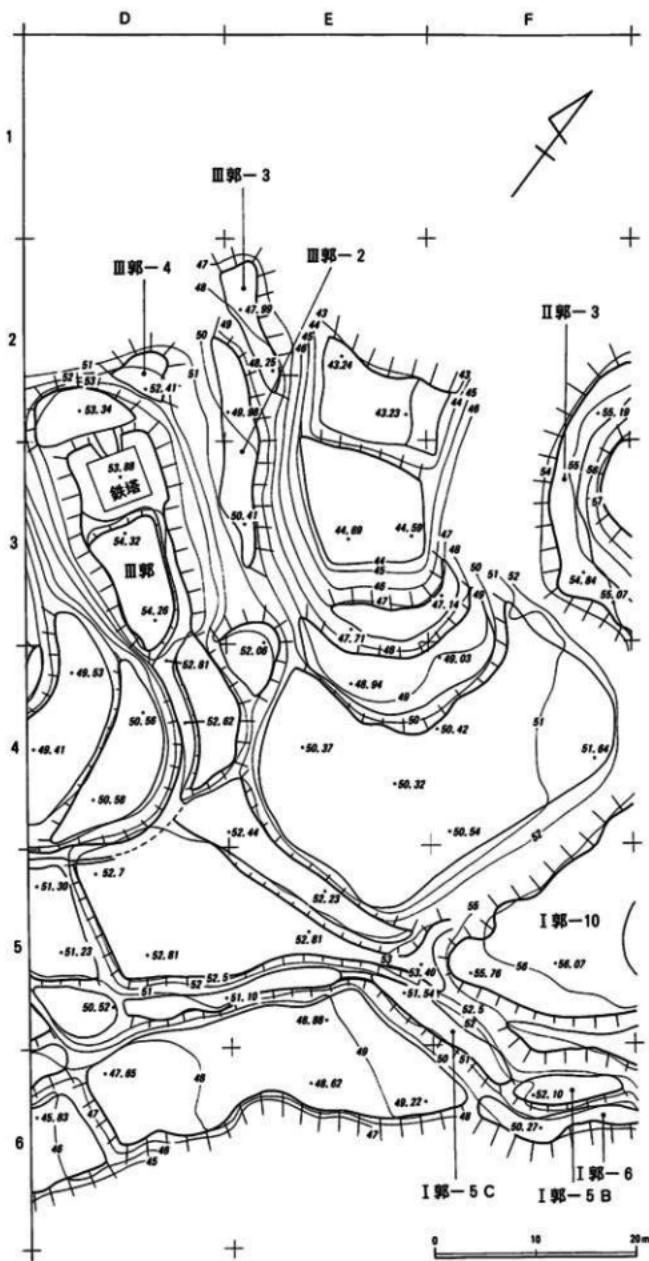
〔Ⅳ郭〕 上面は、長軸10.6m、短軸7.0m。歪な楕円形で、上面の削平度合いは、やや低い。北西側へ下る斜面部に削平は無い。



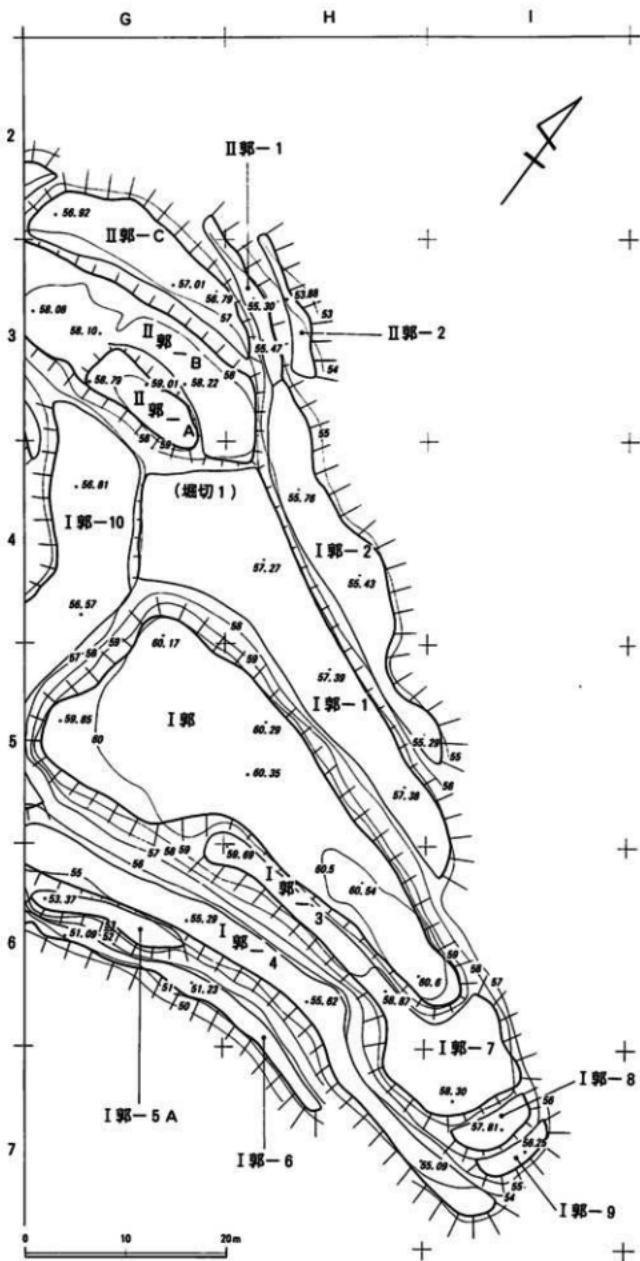
第20図 用木城跡グリッド設定図



第21図 用木城跡測量図①



第22図 用木城跡測量図②



第23図 用木城跡測量図③

第IV章 まとめ

菊水町の中世城跡調査は、その途についたばかりである。まだ資料不足で総論を述べる段階にない。ここでは、本年度調査分の3城跡に限って考察を行う。

〔1〕焼米城跡

比高差58mの小山に築かれた村のセンター的な丘城である。村内の小山を直に利用した城地で、3区画の平場、4本の堀切、階段状地形が、コンパクトにまとまっている。平場の削平度合いは弱く、中心部に残る2本の堀も仕切り溝に近い残存状況にある。通常は物見の場として、時に、城主と領民が集う祀りの場所であったと思われる。I郭から北側と東側の眺めは、低山ながら絶景である。およそ戦闘的な城郭ではない。この類の城は、麓集落を取り込んだ防衛ラインの形成が不可欠で、そうでなければ、城は守れない。「縦構えの城」と呼ばれる所以である。必然的に、住民の大半は、戦闘要員でなければならないが、このことを裏付ける文献記録は、確認されていない。

城跡の据部には、北側から東側にかけて菊池川左岸流域の水田地帯が広がっている。この水田が、中世においても、極めて重要な生産基盤であったことは、想像に難くない。「前田」の字名が残る。南下を走る主要地方道の玉名・山鹿線も、その粗形は古代まで遡るであろう。中世城の分布と主要交通網との関連は、濃密なものがある。さらに焼米地区は、今日、玉名郡菊水町と山鹿市坂田との行政境に位置しているが、この地は、中世まで遡り得る、江戸時代早期からの郡境であったことが確かである。『慶長国絵図』によれば、焼米村は玉名郡に、坂田村は山鹿郡に属している。これらのことから、焼米城が築城される大きな要因になったものと思われる（郡境の城は、高山の稜線に築かれることが多い）。

地形的な特色としては、城跡から南西方向に細長く延びる間道があげられる。瘦せ馬の背のような地形を利用したもので、焼米地区的本村へ通じている。非常時は、逃げ道として、平時は、連絡路として利用されたのである。城跡の周辺部に普通的な地形で、焼米城の掘手にあたる。

城は、山容からして明らかに東向きであるが、城跡の東側・隣接地には、坂田川を挟んで坂田城跡が相対する。焼米城跡に、形状や立地が酷似する城跡であるが、両城跡間の直線距離は僅か640mに過ぎない。到底、同時代に併存していたとは思えないが、付城とも思えず、疑問が残る。

鎌倉時代という焼米五郎の城主説については、文献的に確証が無く、中世城のあり方からも否定的な面が多い。(注) 全国的な傾向として、発掘調査の結果をみれば、城の実年代は、ほとんどのものが戦国時代まで下る。県内で南北朝時代まで遡るのは、球磨郡山江村の山田城跡に限られる。縦構えの焼米城も、戦国時代の城と考えられる。焼米五郎伝説とも相まって、町内では、著名な城跡である。(注) 10頁下段を参照



焼米城の東側隣接地にある坂田城(山鹿市)



焼米城跡東側据部の水田地帯に立つ六地蔵

[2] 萩原城跡

萩原本村の東手の高山が城跡である。比高差178.6mの城山に築かれた本格的な戦闘城で、有事の際の詰めの城と見なされる。今日、菊水町と鹿央町との行政境近くの山稜に位置する。山腹は、急峻で、要害堅固な高所にあることから、通常は物見の場でもあり、攻撃を受けて、戦局が不利となった場合、萩原本村から逃げ込んで、敵勢を迎え打つ白兵戦の場所でもあった。そういう意味で、戦闘城である。3本の大規模堀切は、尾根づたいに移動する敵方の流れを寸断し、斜面部を登ってくる場合は、袋小路の堀底へ追い込んで、討ち取る役目を果たす。萩原城で、中心的な役割を果たす防衛施設である。岩盤を断ち割って掘り窪めた大工事であった。Ⅱ郭直下の堀壁は、急峻に削り落されている。埋没状態を見る限り、最後は、意図的に埋め込まれたようである。萩原城は、落城後に破壊された可能性がある。

山頂のⅠ郭と、その直下に延びる尾根筋のⅡ郭には、兵舎や武器庫などの軍事建物が考えられる。特に「馬喰め場」と呼ばれるⅡ郭は、完全な削平地で、建物構築を前提とした造成工事がなされている。ただし、高所にあるため、建物を維持するためには、強風対策が資本となる。Ⅰ郭の北西側に残る崩壊土塁は、中心的な建物を風から守るためのものであろう。メンテナンスを考えれば、これらの建物は必要に応じて何度も建て替えた可能性が高い。

尾根筋に井戸は無く、生活飲料水は、溜め置き水に頼らざるを得ない状況にある。北側麓の岩清水を汲んで運び上げ、その都度、水甕に備蓄したものと思われる。事実、谷間の一隅を、水汲み谷と呼んでいる。さらに、集落の最上部に位置する「お花畑」と呼ばれる館跡にも水汲み場があり、城山への登城道が通じている。ただし、登山に要する時間は、30分近くを要するために、宿直の兵士にとっては、水汲みがかなりの負担になったであろう。山城の水源確保は、萩原城スタイルのものが多い。ただし、麓城が長引いた場合は、どのような手段によったのであろうか。

直接的な隣集落は、帯状の谷部に開かれた萩原本村であるが、隣村の諸井や、鹿央町の寺米野にも、登城口を持つところから、広域的な支配網の存在が伺われる。戦国時代の「面の支配」を彷彿させる間連地域の広がりである。諸井や寺米野からの登城道は、萩原・背後からの支援部隊の進軍道でもあり、逆に戦局が悪化した場合の退却路にもなり得る。

実際の所、寺米野地区は、米野山城跡の隣集落であるが、意外なことに、地元では、萩原城との強い繋がりが口承されている。「鹿央町誌」にも、その旨の記述がある。

そこで、調査の足を寺米野に延ばし、真学寺があったとされる小堂近くの永野宗季の墓を実見した。「肥後国誌」の米野村の項には「永野入道宗季 真学寺廬跡にあり、内田手永萩原の城主なり」と記されている。縦長の自然石に「永野入道宗季」との碑名がある。かつては、土鏡頭の小塚に建っていたが、今は、石積みの台座に移されている。別の地点に、永野宗季の弟とされる宗久の墓も祀られているが、これは後世に建てられた供養墓である。両脇に同型の小石墓が建ち、内、一つに元禄年間の年号が読める。

城跡間連の地名も残っている。字名「陣内」、萩原城跡への登城道沿いに「お花畑」(集落西側の高台)、集落の中に「馬場」「櫛口」、集落の南西側の外れに「外輪崎」。ここには土塁の残欠がある。萩原本村は、近世に内田手永に属し、中富手永の米野村と区別されるが、「肥後国誌」は萩原本村を米野村の内と注記している。「元禄国絵図」にも「米野村の内萩原本」とある。文献上の記録からも、寺米野と萩原城の繋がりが求められる。「萩原は、昔、米野村の内ということで、米野村から8戸が移住した」という究極の口承もある。

萩原本村と寺米野に伝世する計3枚の和鏡の存在も面白い。いずれも「萩原城に関する鏡」との言い伝えがある。実見した「亀経双鳥文鏡」と「亀経双鶴梅花文鏡」には、戦国時代の様式が感じられ、城に見合う遺物である。ただし、時期的には前者の方が、やや古い感じがする。後者の鏡には、次のような言い伝えがある。



① 萩原城主・永野宗孚の墓



② 永野宗久(宗孚の弟)の供養墓



③ 萩原本村のお花畠 (節)



第24図 萩原城の登城道・関連地名

「萩原城が落城した時に、落ちのびる奥方が、この鏡を置いていった」。寺米野地区の地理的位置から、あり得ない話ではない。ただし、中世城のあり方からすれば、寺米野地区は、集落の北東側に位置する米野山城の麓集落である。

〔1〕萩原本村の伝世品(和鏡)

*池田和寛氏所有(萩原43番地)

①亀経双鳥文鏡

鏡径 : 11cm

外輪厚 : 10mm

厚さ : 中心部 7.5mm

中心部横 3mm

・中心部には、紐を通すために

穴が穿ってある。

(実測 : 烏津義昭氏 製図 : 石工みゆき)

②藤原吉政銘入梅花文方形鏡

縦 : 8.6cm

幅 : 5.4cm

厚さ : 中央 1.2mm

小突起物(上) 2.5mm

小突起物(下) 3.5mm

・裏面の左隅に「野田肥前守

藤原吉政」の銘

・ずっしりとした重みがある。

(実測 : 大田幸博 製図 : 石工みゆき)

* 池田和寛氏所有(萩原1028番地)

藤原吉長銘入鏡

「父が亡くなつてから、所在がわからなくなっています。捜しています」とのことでの、実見出来なかつた。鏡に関する資料は、井出迪裕著の『米野のおもかげ』を参照。

〔2〕寺米野の伝世品(和鏡)

*八木田留富氏所有(鹿央町合里3311)

亀経双鶴梅花文鏡

鏡径 : 11.4cm

外輪厚 : 10mm

厚さ : 中心部 8.0mm

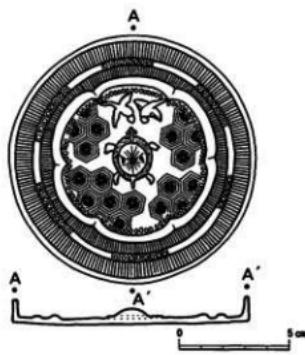
中心部横 2.0mm

・中心部には、紐を通すために

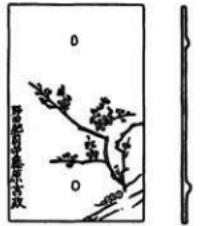
穴が穿ってある。

・萩原本村の亀経双鳥文鏡よりは、軽い。

(実測 : 烏津義昭氏 製図 : 石工みゆき)



第25図 亀経双鳥文鏡



第26図 藤原吉政銘入梅花文方形鏡



第27図 亀経双鶴梅花文鏡

*九山才助氏所有(鹿央町合里3315番地)

河上山城守藤原宗次郎銘入鏡

藤原宗政銘入鏡

萩原城主の持鏡と伝えられるが、江戸時代の柄鏡である。

*寺米野地区の調査については、西林一弘氏(鹿央町教育委員会学務係参事)と井出迪裕氏の協力を得た。

[3] 用木城跡

用木集落の北手の丘陵に城跡が残っている。比高差37.1mの丘城であるが、城城と目される一帯は、段々畠と段状地形が卓越しており、遺構の見極めが困難である。丘城調査の最も難しい面が、用木城跡に現われている。

城跡として、はっきり認識できるのは、I郭の高台と、その周辺部に限られる。II～IV郭は、上面の削平度合いが低く、唯一、I～II郭間の堀切も、端部が段階状地形に繋がって曖昧に終結している。その様な状況下で、特筆すべき唯一の縄張りは、I郭の南側斜面に重なる犬走り状の細長い削平地である。遺構と認定できる段階状地形で、上面が平らな崖面に削り落としの痕跡が残る。上面幅が極端に狭く、後世に造成された段々畠の類ではない。用木城跡のI郭(主郭)を死守するための施設で、白兵戦の折りには、この犬走りに敵勢を追い込んで、上段から攻撃を加えたものと思われる。しかし、丘陵ラインを断ち切る堀切の数が、絶対的に不足しており、城としての造りが甘いことは否めない。

丘陵の西側斜面部に卓越する凹面状の段状地形(植林地)は、一昔前まで、畠地であったと思われる。確かに上段の崖面には、削り落としの痕跡を残すものもある。しかし、中断から下段にかけては、開墾地のようにも思え、全段の祖形を段階状地形に求めるることはできない。これが、南側緩斜面の段々畠となると、もう完全にお手上げである。法面の段差は低く、どこまでが段階状地形の再利用であるか、まったく判断がつかない。縄張り調査の限界である。

用木集落のあり方も特徴的である。道路沿いに幅広く展開する形になっており、城跡を核とした集落の造りではない。江田川が集落の南縁を流れているものの、地形による防御面での利点は、皆無に近い。この点において、焼米城跡や萩原城跡の籠集落とは、大きな相違点がある。簡略化された總構えの城であろう。地元において、城跡という認識が余り強くないのも、こういう点にあるのかもしれない。

I郭の西側斜面に貼り付く切石は、石垣の様でもあるが、残欠状態が一部に限られることと、実態解明のためには、発掘調査が必要であることから、今回は、写真報告に留めた。なお、測量調査を終えた時点で、南側斜面の段々畠と日吉神社との境に堀切と思われる仕切りを見発して、愕然とした。地形を再確認すると、神社の位置は、I郭から南北方向へ派生する丘陵の最下部に当たっていた。そうなると場所的に神社の境内は、館跡の可能性があり、用木城跡の縄張りも、この丘陵ラインの流れに沿うとの考え方方が出てきた。そうなれば、一応、縄張りとしてのまとまりも出て来る。しかし、この場合は、南側緩斜面部のあり方(段々畠)が気になる。縄張りの確定について、今後に検討課題を残す。

用木城跡は、古道(現：主要地方道大牟田・植木線)沿いに築かれた、小規模な丘城である。

〔4〕文献による町内所在の城跡

(1) 国郡一統志

北嶋雪山著。雪山は儒医で、肥後藩に仕え400石を領したが、陽明学を奉じていたため、寛文九年(1669)に追放され、以後、仕官しなかった。長崎・江戸に学び、天下第一の人と称せられた書である。元禄十年(1697)62才で没。寛文七年から雪山が藩に頼って、肥後内の寺社、古跡を調査した結果のまとめが本書である。以後、藩庫に秘蔵され、細川家永青文庫で、昭和38年に発見。中世の様相を十分に遺した肥後最初の地誌である。名藍志・名社志・寺社総数・名蹟志の4部からなる。古城址の記事は、後の2部にある。古城数は、寺社総録に122城、名蹟志128城。しかし、個々の城は一致せず、実数は140城。

玉名郡では、15城を記載している。菊水町関係では、2城(用木城・萩原城)が含まれる。

記載城名	当該城名	所在地	内 容
南閥古城	大津山城	南閥町	大津山河内守居之食邑一万四千百八十石天正十四年豊臣秀吉公發向西國時城廬使佐佐藤興守家臣守之後清正公守當國始使加藤清兵衛守之後使加藤美作守守之慶長九年墮之築新城
新 城	鷹の原城	南閥町	慶長九年清正公築之使加藤美作守守之元和二年有家康公命一國一城之外墮之
和仁城	田中城	南閥町	城主和仁勘解由親實食邑二千石天正五年落城
拾町城	坂本城	南閥町	城主邊春能登守親行食邑四千三百八十石天正七年落城
鴻巣城			城主大津山河内守家後
下岩城			
大田黒城	神尾城	南閥町	大津山某守之
板楠城			城主板楠左馬頭
用木城	用木城	菊水町	城主用木氏
萩原城	萩原城	菊水町	城主長野氏
龍田城			
溝上城	溝上城	玉名市	
小代城	小代城	荒尾市	
安樂寺城	稻佐城?	玉東町	城守稻佐治部大輔也大平記載之
坂下城			

(2) 肥後地志略

井沢雄龍著。肥後藩士で、60余種の著述がある。本書は、神社、古跡、陵墓、器仗、伝説の6部門に分け、各門ごと、郡別に配列して考証を記している。古城跡は、古跡門に96城あり、別に阿蘇郡で20城と、小国で9城を記している。

玉名郡の項では、40城の記載がある。菊水町では、萩原城跡と日平城跡が、取り上げられている。

記載城名	内 容
萩原城跡	萩原村にあり、長野重利入道宗孚が城なり。天正7年落城す。
日平城跡	天文二十一年十二月十三日大友義鎮肥後ら発向し、玉名郡日平村の城を攻落す。城主は小森田源四郎源満求なり。此城は小森田の城の事を云へり。一説には城主小森田又次郎天正十一年薩州勢攻落すとも云う。

(注)(1)・(2)の参考文献:『熊本県の中世城跡』森下功氏執筆分

(3) 肥後國誌

肥後國誌卷之八 玉名郡 内田手永

江田莊

用來村 高五百六十五石餘岩下ト云小村アリ

用來山 雄模八町高 山形一町五反同一町竹藪ナリ

用來東川 小川也水源山本郡下野村邊ヨリ流出當郡姫井村用來村萩原村邊ヲ通り日平村諸村江田村ヲ經テ

高瀬川ニ入ル

山王廿一社 祭十月十七日社人森木播磨 氏神也

阿蘇六之宮 森ニ鐵座ナリ

森社 天神社二

六地藏

(補)森云本書六地藏トノミアリテ銘文等ノ記ナシ今古塔調査錄云玉名郡用木村横枕ト云ル所ノ墳墓地

ノ側ニ地蔵塔アリ里俗六地藏ト稱斯竿石ノ銘中央ニ六地藏左右ニ奉建立爲各〇大槻郡現世安陸後生善

所也〇之故者昔文明十四年壬寅三月十六日書之

備考云土俗の傳モナク大槻郡トノミアリテ姓名ヲ關タレハ尋カタシ云々

寶蓮寺跡 宗旨年代不分明本尊ノミ小堂ニ安ス

東郷莊

燒米村 高二百六十九石餘原村高百四石六斗餘當村ノ内也即今屬此村

燒米川 小川也水源中富手永米野谷ヨリ出板原ヨリ當村ニテ大川ニ入ル山鹿郡玉名郡ノ堺川也

熊野三社 祭十一月九日社人吉田信謙 氏神也 文德帝天元年十一月神靈此所ノ峯ニ光明ヲ放チ三歳ノ幼

兒ニ化シテ告アル故即チ社ヲ建ルト社記ニ見ヘタリ

稻荷宮 妙見宮 荒谷頭岩上ニ鐵座也

西福寺 摘洞家山鹿杉村日輪寺末寺ナリ

小堂 二ヶ所

熊野宮 祭十一月四日社人吉田周防 桜原村ニアリ寛文年中燒米村ヨリ此所ニ勧請ス

米野村ノ内

萩原村 高百六十六石餘當村舊ハ米野村ノ内也今米野村ハ中富手永ニ屬シ當村ハ内田手永ニ屬ス

萩原城跡 府ヨリ味取新町内村姫井村通六里也當城始ハ内田相良藤原重貞在城天文ノ比落去ス其後天正ノ

比ハ天武帝ノ皇子舍人親王ノ末葉永野壹岐守清原重列入道宗学七十三町 今高ニメ五千三百七石又日五千三

百七石 ラ領ノ居城シ天正七年隈部來リ攻め三月三日壹四ツ時落去シ終ル宗才カ墓ハ中富手永米野村真

學寺ニアリト云霜野雜記云永野壹岐守親次ト云者萩原米野江田村合テ三百町ラ領シテ當城ニ居リ其伯父

隈部但馬守親永遠恨有テ元龜三年三月三日當城ヲ攻落ス此時親次ハ筑後國ニ退去云々 私曰孰カ是ナルヲ

不知 城地ハ山城也今ヤ高サ百七十四間東二百四十八間西百八十四間南七十四間北曲輪東共ニ千三百九

十七間半也城惣周リ壹野西ハ平ラ也半分餘ヨリ下ハ雜木竹藪アリ本丸東西十二間半南北十二間五尺二ノ

九ハ本丸ノ北ニアリ等七間二尺南北十一間半但本丸ヨリ三ノ丸ノ間低シ三ノ丸モ本丸ノ北也三ノ丸東西

六間四尺南北卅二間但ニ九ヨリ一間半低シノ堀本丸ノ北ニテ堀口三間流廿七間半深サ三間以前ノ築

少シモ損セスニノ堀モ同ク北也堀口二間流廿三間深サ三間一ノ堀トニノ堀ノ間ハ六間半三ノ堀口二間流

廿三間深三間但二ノ堀三ノ堀トノ間廿二間アリ是モ少モ損スル」ナシ

(補)古記集覽昔断聞書云玉名郡荻原村長野山ノ城ハ隈部ノ一族長野壹岐守親次居城ス如何ナル意恨アリ
テカ天正十二年山鹿彦次郎重安 山鹿郡湯町清瀧ノ城主 攻之三月三日ノ朝落城ス此親次ノ家來ニ川島
ト云者秋月長門守ニ仕ヘ知行ヲ領シ子孫今ニ有リト云 霜野雜記ニハ親次筑後ニ退去シ後ニ秋月長門守ニ勤
仕ス云々

(補)前記ニ水野姓氏ノ人古書ニ見ヘス隈部系圖 事蹟通考系圖卷十 云宇野七郎親治 保元ノ比ニ肥後ニ
來タル 四代孫刑部丞直治長女長野太郎藤原隆基妻トアリ直治ノ末裔阿佐古式部大輔武貞弟長野修理
亮右俊山鹿郡長野村ヲ領シ因テ家號ヲ長野ト稱ストアリ其外菊池系圖 事蹟通考系圖卷一 菊地則隆六
代孫菊池肥後守隆直長子水野太郎隆長文治元年三年廿四日從 安德天皇致壇浦トアリ是ノ末裔カ更ニ
不分明

森大明神宮 祭十月十三日 社人著木近江 森ニ鎮座或説天神社

小社 一ヶ所

小堂 一ヶ所

(4) 古城考

荻原古城

荻原村にあり、始めは内田相良藤原重貞在城、天文の比落去、天正の比は、天武帝の皇子舍人親王の末葉、長野壹岐守清原重輝入道宗半、七十三町 高にして五百卅石を領して、當城に居れり、天正七年落去す、霜野雜記に云、長野壹岐守親次、荻原、米野、江田村三百丁を領して、當城に居れり、其伯父隈部但馬守親永遺恨有之、元龜三年三月三日、當城を攻落す、親次は筑後國に出奔すと云、此城山城也、高百七十四間、東三百四十八間、西百八十四間、南七十四間、北曲輪千百九十七間半、城の惣廻壹野也、西平下は林藪也、本丸東西十二間半、南北十二間五尺、二の丸より北也、東西七間二尺、南北十一間半、組本丸より三の丸の間低し、三の丸、本丸の北也、東西六間四尺、南北三十三間、二の丸より一間半低し、一の堀、本丸の北也、口三間、流れ二十七間半、二の堀、本丸の北也、口二間、流二十三間、一二の堀の間、六間半、三の堀、口二間、流れ二十三間、二三の堀の間、二十二間あり、

(5) 肥後人名辞書 玉名郡の部

焼米五郎（元寇勇士）

東郷の豪族なるべし(東郷の豪族の内に、今尚、焼米と云ふ部落あり)。元寇の役に草忠を画せし人物なり。繁根木八幡の大野小次郎國慶、江田又太郎秀家と共に焼米五郎の奮闘は竹崎秀長の蒙古襲来絵詞の中に存す。

江田秀家（元寇勇士）

元寇文永の役に参加して奮闘したる一人なり。玉名郡江田郷の豪族にして、江田又太郎秀英と云ふ。(蒙古襲来絵詞)

(6) 竹崎城跡 (熊本県文化財調査報告第17集)

菊水町に關係の深い江田氏と、やいごめ五郎は「蒙古襲来絵詞」に登場する人物である。これらの人物と

「絵詞」については、県が昭和50年3月に発刊した『竹崎城調査報告書』に中村・工藤両氏の詳しい論文が掲載されている。関係する箇所は下記の通りである。

①「蒙古襲来絵詞」について

(著) 中村一紀

1. 絵詞の内容

「蒙古襲来絵詞」は、別名「竹崎季長詞」といわれ、もと大矢野家に所蔵されていた。大矢野家々伝によるところによると、竹崎氏滅亡の後、宇土の名和顯孝に伝わり、その後天草大矢野城主の大矢野種基が顯孝の娘と結婚した際、絵詞が名和家とは関係ないので、屏の引出物として名和顯孝より種基に譲られたという。その後、大矢野氏は加藤家に仕えることになった。加藤家没落のあと、細川氏の臣となり、文政八年二月、大矢野門兵衛は絵巻の散逸するのを恐れ、細川家に保管を依頼していたが、明治二年廃藩のとき、大矢野家に返還された。

明治二十二年十二月大矢野十郎より明治天皇に献納され、現在に至る。この絵詞を御物本といい、原本としている。

御物本「絵詞」は上・下の二巻に分かれているが、模本の中には三巻の体裁をとっているものもある。御物本「絵詞」の体裁は文政年間、肥後熊本の画家福田太華により、まとめ整理されたもの。故に模本の中の三巻構成は何をもとにつくられていったかは不明であるが、内容構成により、二巻構成よりは三巻構成の方がよいのかも知れない。

内容は次の三つに分けられる。1. 文永の役、2. 関東出訴、3. 弘安の役である。

(本報告書に関連するのは「詞一」である。注：ゴシック体部分は、江田氏に関係する部分で、今回新たに取った処置である)

詞一

おきのはまにくんひやうそのかすをしらすう
ちたつ、すあなか、一もんの人々あまたあるなかに
あたの又太郎ひていあことに申うけ給はる
によりてかふとをきかへてこれを志るしにてあ
ひたかひにみつくへきよしを申次とろに、
いそくあかさかにちんをとるにつきて、一もんの人々
あひむかふに、たいしやうくんたさいのせうに三郎さへ
もんかけすけ・のたの三郎二郎すけしきをもて、
あたの又太郎ひていあのもとにけんさんにいり候
し時、一しよにてかせん候へきよし申候き、あかさか
はむまのあしたちわろく候、これにひかへ候ハ、さ
ためてよせきたり候はんすらん、一とうにかけて
をものいにいるへきよし申さる、につきて、けん
しちのやくそくをたかへして、をのへひかへしあひた、
たいしようをあひまたハ、いくさをそかるへきほとに、
一もんのなかにて、すあなかひこのくにのさきをかけ
候はんと申てうちいつ、

(著) 工藤 敬一

季長の出自について

「詞一」の冒頭に登場する「えたの又太郎ひでいま」は、文永の役で息の浜に集結した季長が、たがいに戦功を見つぐために兜を交換した「一門の人々あまたあるなか」の一人であった。「えた」は江田で、その名字の地は肥後玉名郡江田(現菊水町)と考えてまちがいはあるまい。南北朝期、相良定頼以下庶子等が、一色道獻(範氏)から配分された所領の中の、「山田左衛門次部分」に「一所 同國江田村田地式拾町江田太郎跡」とある江田太郎や、南北朝後期、「菊池殿」の命によって玉名郡野原東郷(現荒尾市)内増永名を宛給された江田次郎五郎は、又太郎秀家の後裔と見てよいであろう。江田氏についてさらに注目すべきことは、建久八年(1197)六月の薩摩国帳写に、高城郡・東郷別府・祁答院に存在する得宋名(それぞれ二町・四町・十三町)の名主として「肥後國住人江田太郎実秀」が見えることである。その名前から見て又太郎秀家と同族と考えてよいと思われる。なお同年十二月の薩摩国地頭御家人注文には江田四郎の名が見える。そのほか、文保元年(1317)十二月、島津道義(忠宗)が菊池庄領家職の替えとして宛給された所領の一つである肥前国福万名地頭職は、「江田忍阿跡」であったことも参照されよう。以上の事実よりみて、江田氏が肥後國江田を本拠とし、薩摩あるいは肥前にも所領を有するかなりの有力武士であったことは、まず確実としてよいであろう。

「絵詞」の中から明瞭に季長の一門・親類と知られる江田・野中の両氏は、いずれも玉名地方の勢力であったということになる。なお、江田氏については、これを菊池一族と考える明証をあげえないが、それを否定する材料もない。ちなみに当時玉名地方に転居していた武士団は、小代氏など東国下りの御家人を別とすれば、菊池氏系統以外では、大野別符の大野氏を惣領とする紀氏一族がもっとも顯著な存在である。「絵詞」に出る大野小次郎国隆はその惣領である(詞十一)。紀氏一族は、国隆の子時隆が中村氏、同じく国秀が築地氏、同季隆が本宗の大野氏を号するほか、入粟の中原・山田・岩崎・尾崎・河崎をあわせて、のちには大野八名衆と呼ばれた。その外、前原・野口・高道・西窪などがその庶子家であるといわれている。これらの中に江田・野中・両氏がふくまれていないことは、両氏が菊池氏系である可能性をより大きなものとするといえるだろう。

ところで、江田・野中両氏のみでなく、季長ないし竹崎氏自体もまた玉名地方と何らかの関係をもつていたと判断される。その理由の第一は、菊水町江田からもさほど遠くない天水町に竹崎の地名が現に存在することである。季長自身は、文永の役当時松橋の竹崎(豊福庄内)を本拠としていたことは、後術のごとく間違いないと思われるが、玉名地方に関係所領があった可能性がつよい。江田・野中両氏と同族関係にあることのほか、弘安の役の際、季長の丘船に乗っている者のなかに、「やいごめの五郎」がある(絵十三)ことも注目される。嘉祐二(1236)年の大友親秀の譲状に「豊福庄内久具十郎・同三郎 付焼米・小藤次名 地頭職」とあり、やいごめの五郎の名字の地がこの焼米であったことはほぼまちがいはあるまいが、焼米の地名は旧江田村に隣接する旧東郷村にも存在するのである。竹崎・焼米の二つの地名が、松橋と玉名にいずれも隣接して存在することは、全くの偶然とはいえないであろう。なお推測をたくましくするならば、この玉名地方と有明海をはさんでむかいいあう佐賀県藤津郡の海岸にも竹崎の地名があること、天水町竹崎・松橋町竹崎がいずれも有明・不知火海の海岸であったこと(今日では干拓などによりともに海岸からかなりはなれている)、などからみて、あるいは竹崎氏の本質の地はむしろ玉名地方にあり、海上活動を通じて、島原半島や不知火沿岸にまで勢力をのばすにいたった一族であったとができるかもしれない。弘安の役の際、季長が独自の兵船をもっていたことも(実際は、合戦の場に間に合わず利用出来なかつたが)、そのような観点から理解することも可能であろう。そうすれば竹崎氏を平安中期以降、肥後北部一帯に隣居した菊池系氏族と見ることは、いよいよ妥当性をますことになるであろう。

〔5〕菊水町の中世城跡調査

熊本県が昭和53年3月に発刊した『熊本県の中世城跡』は、中世城跡の悉皆調査報告書である。県が、文化庁の国庫補助事業として、3ヶ年計画で取り組んだ調査結果の集大成で、全国に先駆けた画期的なものであった。委嘱された各地域の調査員が、個々に現地調査を行い、遺構の残存状況を把握した。ついで、提出された調査カードを元に、必要に応じて、文化課職員が補足調査を加え、専門調査員は、地域の中世史や、城郭本の文献解題を執筆した。掲載城跡は463城で、菊水町関係は14城である。町内関係の城跡分については、城名を整理し、文面を簡略化すると共に、記述内容が明らかに誤っている個所については、修正して下記にまとめた。なお、菊水町教育委員会が作成した町内の遺跡分布図には、2城跡(天御子城跡・米波尾城跡)が追加されている。さらに、今回の字名調査で、新たに1城跡の存在を確認した。

『熊本県の中世城跡』は、大田が文化課に赴任して、最初に手掛けたものである。不備な個所も多く、後悔の念に駆られるが、その後、市町村誌の編纂事業などの機会を通じて長年に渡り、補足調査を実施してきた。菊水町の中世城跡調査も、その流れの中にある。

なお、熊本県文化課が平成10年3月に作成・発刊した『熊本県遺跡地図』には、435城を数える。その内訳は、古代山城が1城、中世城が429城、近世城が5城である。

①江栗城跡（大字江栗）

城名は造語。「城尾」が城跡で、三加和町との町境にある。丘頂には、小規模な平坦地があり、野首に堀切状の窪地が残る。南側山腹中の階段状地形には、井戸跡という窪地もある。城跡からは、明治30年頃、槍の穂先らしきものが出土したと伝わる。

②宮山城跡（大字内田）

城名は造語。「宮山」が城跡で、裾部に「赤子宮」。丘頂には「城床」と呼ばれる平坦地があるが、九州縦貫自動車道によって大半が削り取られている。丘頂直下には、階段状地形があり、城床から移された五輪塔が並んでいる。その中には、大永二年(1522)と永正十年(1513)の年号を刻むものがある。

③内田城跡Ⅰ（大字内田字今城）

城名は造語。「今城」の字名を残す丘陵端が、城跡地である。丘頂は、三段に分かれる平坦地で、斜面部に階段状地形がある。野首には、堀切と思われる窪地が残る。麓の墓地には、「内田源兵衛君以寛文五年(1665)十二月二十三日没、源兵衛君内田古城主胤也(以下略)」と刻まれた墓碑がある。慶応元年(1865)に建立されたものである。

④内田城跡Ⅱ（大字内田和仁石山）

城名は造語。菊池川の左岸域にある「城山」が城跡で、裾部に田中城の和仁御前を祀った「和仁石宮」。山頂に平坦地があるが、山腹は、石切場となっている。

⑤天御子城跡（かまと・天御子）　『熊本県の中世城跡』には未掲載。

⑥志口水城跡（大字大屋字城尾）

城名は造語。志口水集落の南東側に位置する小山が、城跡である。「城尾」という字名が残っている。丘頂

は平坦地で、東側の斜面部に階段状地形がある。

しかし、集落内には城跡に関する伝承は何も残っていない。

⑦燒米城跡（大字燒米）

地元の口承によれば、城主は、燒米五郎。丘陵末端の「城山」と呼ばれる小山が城跡である。山頂は、東西に細長い平坦地で、2条の堀切によって三区画に分かれ、東端の主郭に城主を祀った拝殿と碑がある。東側麓の観音堂には、数多くの五輪塔が残っている。

⑧立石城跡（大字原口字立石）

下津原の墓地に、「石原家の祖先は、立石城の子孫」と刻まれている。立石集落には、城に関する伝承はないが、野次山に「立石さん」と呼ばれる自然石が祀られている。集落には、石原姓が多い。野次山が城跡参考地であるが、九州縦貫自動車によって、大半が削り取られている。

⑨江田城跡（大字江田字江光寺）

地元の口承によれば、城主は、江田氏という。「城山」と呼ばれる丘陵が城跡である。丘頂には、平坦地があり、「城さん」という自然石が祀られている。丘頂の直下斜面には、馬蹄形の曲輪が巡る。西側は、緩傾斜地で小規模に削平地がある。東側の野首（鞍部）には、堀切が刻まれている。昔は、江田と皆行原を結ぶ通路であった。南側の斜面部には、階段状地形があり、五輪塔が散在している。その一隅は、鉢跡という。

⑩鶴原城跡（大字江田）

『古城考』に「請村にあり、城主年代未考」とある。瀬川地区の鶴原神社一帯が、城跡と考えられている。

⑪米波尾城跡（大字米波尾）　『熊本県の中世城跡』には未掲載。

⑫乙城跡（大字江田）

石碑文から、城主は城謙岐守という。三宝寺跡近くの石碑は、「香雲院殿城謙岐守入道源八一要大居士 文禄元壬辰正月十五日」と刻まれている。「乙城」と呼ばれる丘陵が城跡地である。丘頂には、平坦地があり、直下斜面には、馬蹄形の曲輪が巡る。長野集落の「圓」は、鉢跡と伝わり、祠に納められた五輪塔がある。

⑬牧野城跡（大字江田）

城主は内空内守。落城は、天正16年(1588)で、「かくれ里」と呼ばれる城内の岩蔭は、「乳母が姫を連れて、落ち延びる際に隠れた所」という。牧野集落端が城跡で、広い平坦地がある。麓の湧水地に井戸があり、「どんこ坂」という水汲み道がある。

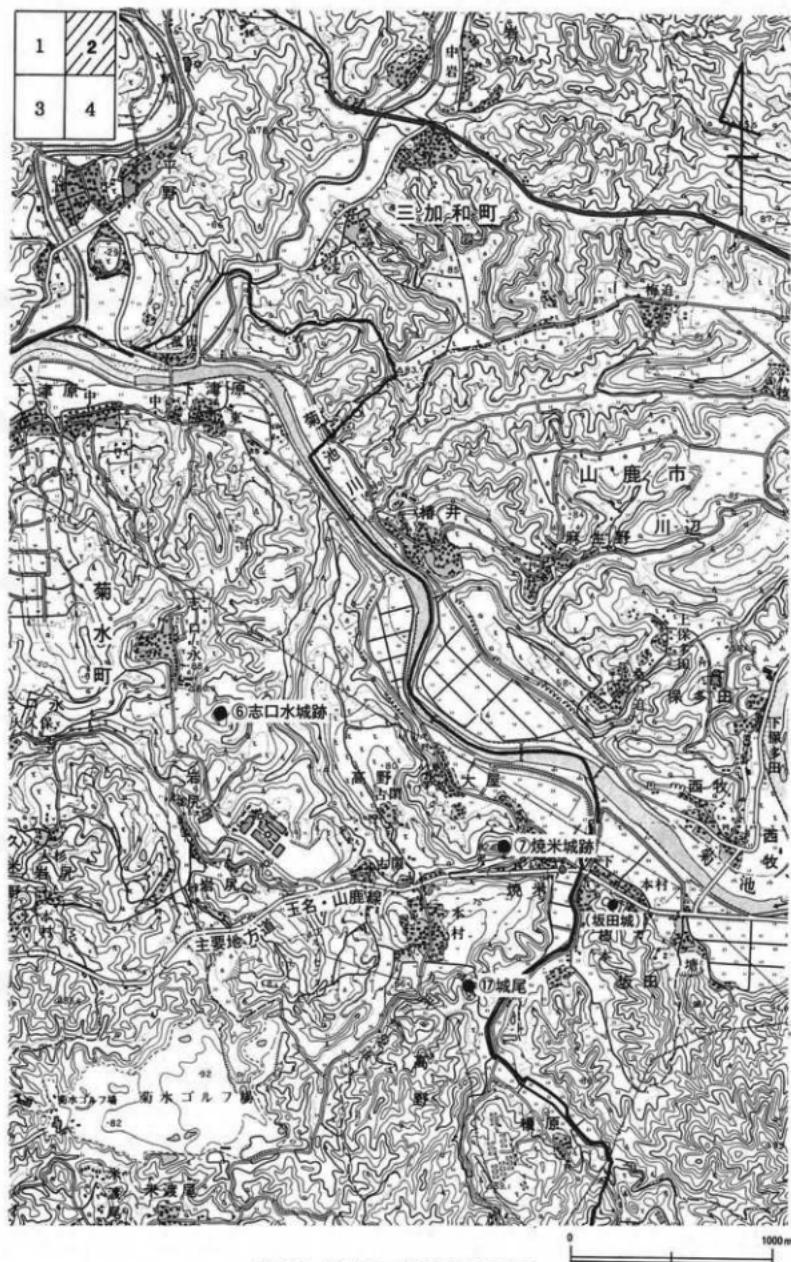
⑭用木城跡（大字用木）

『国郡一統志』によれば、城主は用木氏。「城の尾」と呼ばれる丘陵が城跡である。用木集落の北側に位置している。丘頂は帯状の平坦地をなし、南北方向の斜面部に階段状地形がある。周辺には、追が巡っている。近くの二山に観音寺跡と宝蓮寺跡がある。

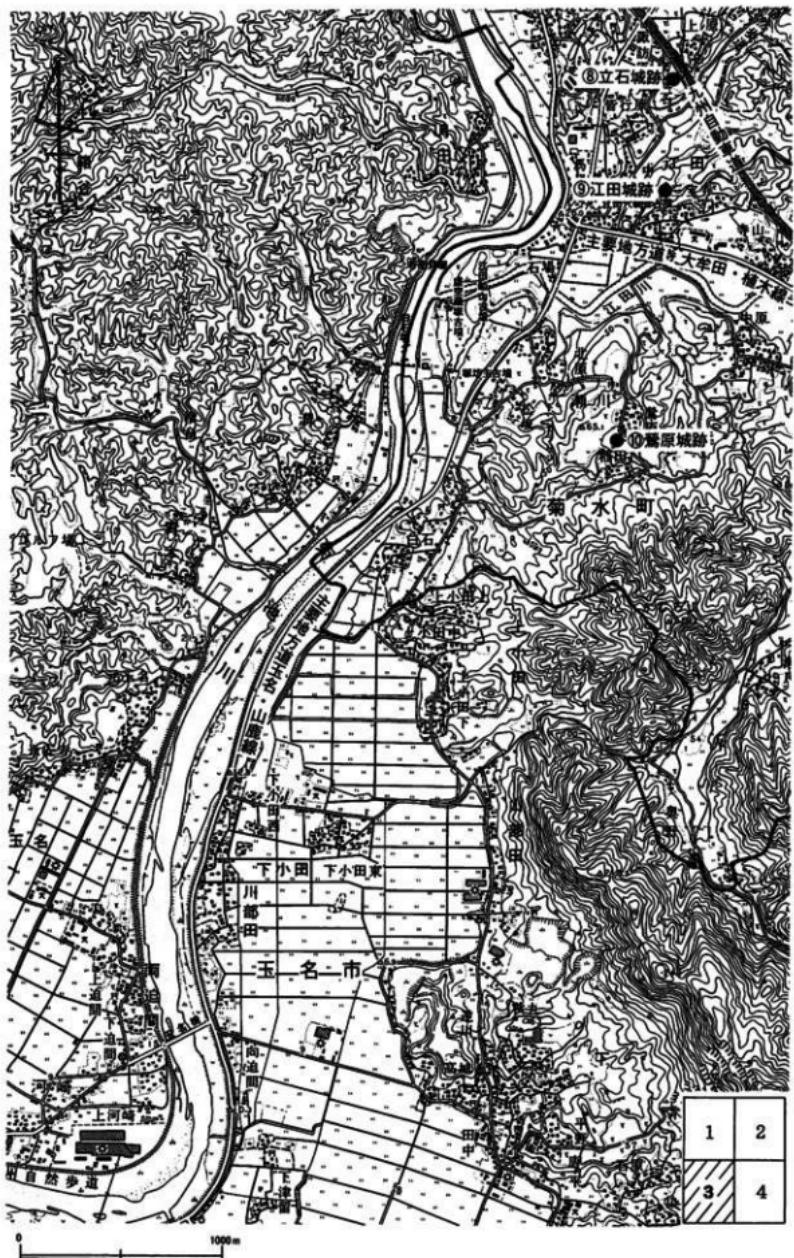
当該地の最高所は、帯状形の平坦地(南東方向に主軸を呈し、長さ50m・幅20m)となっており、さらに南



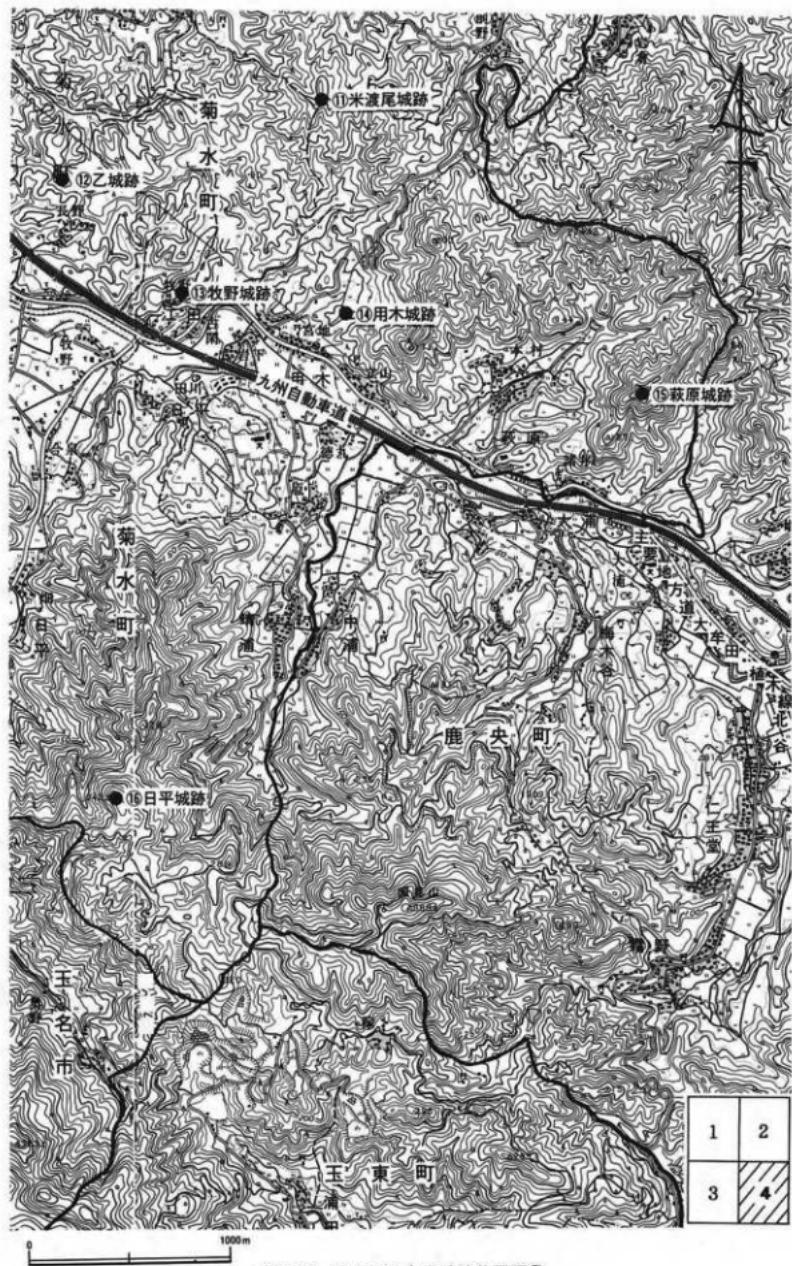
第28図 菊水町の中世城跡位置図①



第29図 菊水町の中世城跡位置図②



第30図 菊水町の中世城跡位置図③



第31図 菊水町の中世城跡位置図④

西方向に下る丘陵地の斜面部には、幅広い階段状地形が観察される。また、周辺部はいずれも城跡にふさわしい迫となっている。

しかし、当該地は全面畠地となっている事もあって、かなりの現状変更を受けているものと思われる。なお、城跡の東方向に広がる山後の谷間に、「觀音寺跡(北東方向)」と「宝蓮寺跡(北西方向)」がある。

⑩萩原城跡（大字萩原）

城主は、「国郡一統志」が長野氏とし、「古城考」は長野重郷・親次と、内田重貞を挙げ、落城期を天文・天正七年(1572)としている。

「城山」とも呼ばれる萩原山(標高213.4m)が城跡で、登城口は、萩原本村と諸井の外、脚町の鹿央町寺米野にある。山頂には平坦地があり、北東方向に下る尾根筋に3条の堀切が残っている。「古城考」には、「一の堀」「二の堀」「三の堀」とある。

萩原本村と寺米野両地区に、城跡関連の鏡や地名が残っている。萩原本村の持続は2枚で、池田一郎氏と池田都築氏が所有する。鏡跡は、「お花畠」とよばれ、本村の最高所の畠にあり、水汲み場とされる所も残っている。一方、寺米野の鏡は、城主の鏡(丸山敬助氏所有)と、奥方の鏡(八木田留宮氏所有)という。

⑪日平城跡（大字日平）

花牟礼城・華牟礼城・花群城・花叢城の書き方がある。「古城考」によれば、隈部家臣の小森田氏一族(子孫は越庄屋を勤めたという)が居城した。落城時は、天文二十年(1551)・天正八年(1580)・天正十一年(1583)の三説がある。

標高338mの花叢山が城跡で、日平と靖浦に登城口がある。山頂は平坦地で、毘沙門天が祀られている。三方向に延びる放射状尾根筋には、4条の堀切が刻まれてお(内、1つは二重堀)り、その間に古戸戸(どんな旱魃の時にも、水が枯れたことがなく、雨乞い祭りに、この井戸水を供えると雨が降ったという)も残っている。靖浦には、「障山」(小森田氏と島津氏の戦いの場という)や「大城戸」の地名と、「靈社さん」と呼ばれる碑(小森田又次郎の討ち死に場と伝えられる所で、嘉永五年の建立)が残っている。日平には、花叢山吉祥寺跡がある。

写 真 図 版



図版 1 焼米城跡 I郭（東側から望む）



図版 2 焼米城跡 I郭から東方向を望む



図版 3 焼米城跡 堀切 1
(東側から望む)



図版 4 焼米城跡 堀切 2
(東側から望む)



図版 5 焼米城跡 III郭



図版 6 焼米城跡 III郭（西側崖面）



図版7 萩原城跡 遠景



図版8 萩原城跡
麓集落の萩原本村



図版9 萩原城跡 II郭-1
(I郭から望む)



図版10 萩原城跡 II郭-1の段差
(II郭-2から望む)



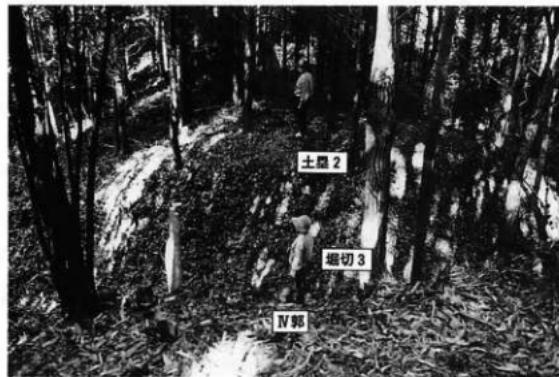
図版11 萩原城跡 堀切1 (III郭から望む)



図版12 萩原城跡 堀切2とIII郭
(IV郭から望む)



図版13 萩原城跡 土壘 2



図版14 萩原城跡 堀切 3
(II郭から望む)



図版15 萩原城跡 堀切 1
(II郭 - 2 から望む)



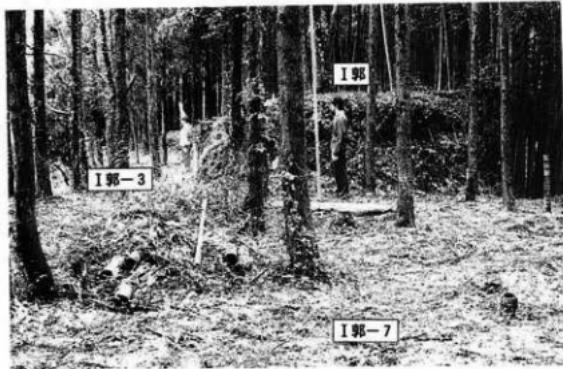
図版16 用木城跡 I 郭平場



図版17 用木城跡
I 郭平場の南東端を望む



図版18 用木城跡
I 郭一と I 郭北側崖面
(北西側から望む)



図版19 用木城跡
I郭の南東崖面とI郭-3
(I郭-7から望む)



図版20 用木城跡
I郭-10とI郭北西崖面



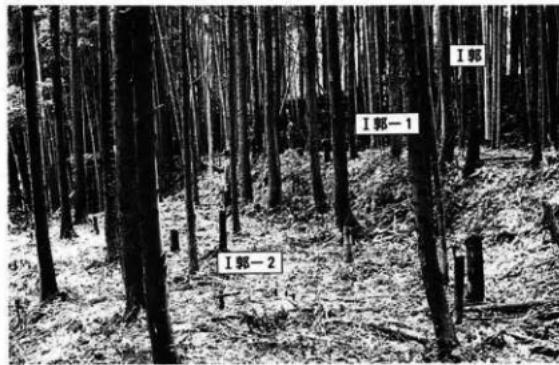
図版21 用木城跡 I郭北西崖面を望む



図版22 用木城跡
I 郭平場北西崖面に残る
積み石



図版23 用木城跡
I 郭-4 と I 郭-7



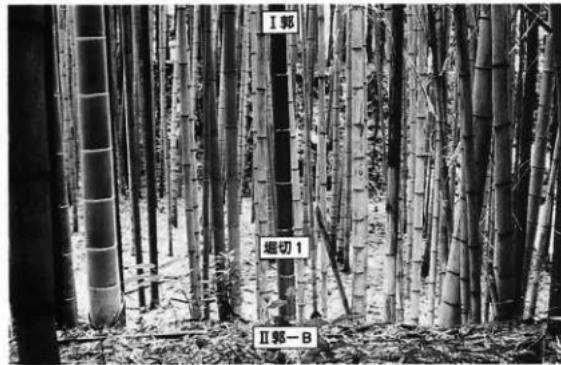
図版24 用木城跡
I 郭北側崖面
I 郭-1 崖面
I 郭-2



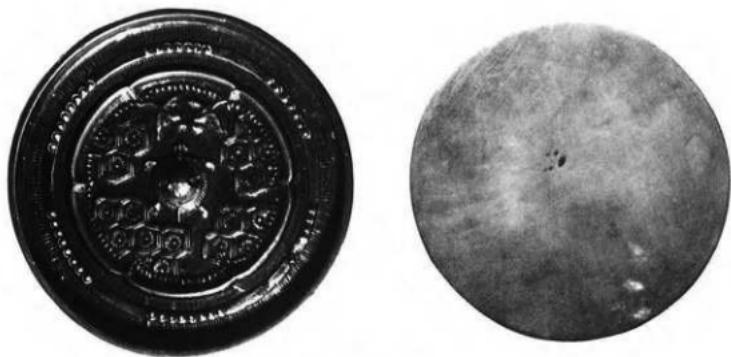
図版25 用木城跡
II郭-Aの西側段差面



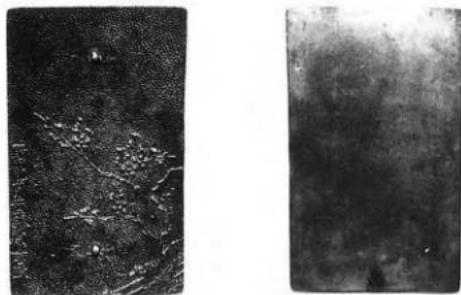
図版26 用木城跡
堀切1とI郭-1の
崖面を望む



図版27 用木城跡
堀切1とI郭-1の
I郭側を望む



亀紐双鳥文鏡



藤原吉政銘入梅花文方形鏡

図版28 萩原本村伝世の和鏡



図版29 寺米野伝世の和鏡 亀紐双鶴梅花文鏡

報告書抄録

書名	焼米城跡・萩原城跡・用木城跡
シリーズ名	菊水町文化財調査報告 第14集
編著者名	大田幸博・益永浩仁
編集機関	菊水町教育委員会
所在地	熊本県玉名郡菊水町江田3886
発行年月日	1999年3月31日

所収遺跡名	所在地	調査期間	調査原因
焼米城跡	熊本県玉名郡菊水町大字焼米字城	1998年7月20日 ～ 1999年3月31日	学術調査
萩原城跡	大字萩原字城内		
用木城跡	大字用木字河原毛		

遺跡名	主な遺構
焼米城跡	山頂と小尾根筋に削平地と堀切。斜面部に階段状地形。 (小山に築かれた縦構えの城。村のセンター的な役割も果たす)
萩原城跡	高山の尾根筋に大規模な削平地と堀切。土塁も残る。 (本格的な山城。有事の際の詰の城)
用木城跡	中心部の高台。斜面部の削り落としと、犬走り。 (小規模な丘城)

菊水町文化財調査報告 第14集

焼米城跡・萩原城跡・用木城跡

平成11年 3月31日

【発 行】

菊水町教育委員会

〒865-0136 熊本県玉名郡菊水町江田8886

☎0968-86-3132

【印 刷】

(株)大和印刷所

〒862-0931 熊本県菊水町島田920-11

☎096-388-0303

この電子書籍は、菊水町教育委員会が発行した『菊水町文化財調査報告 第14集 焼米城跡・萩原城跡・用木城跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

菊水町と三加和町は、西暦2006年に合併して和水町となりました。調査記録及び出土遺物は、和水町教育委員会が保管しています。

書名：菊水町文化財調査報告 第14集 焼米城跡・萩原城跡・用木城跡

菊水町所在の中世城跡

発行：和水町教育委員会

〒861-0913 熊本県玉名郡和水町板楠76番地

TEL 0968-34-3047

電子書籍製作日：2024年2月28日